



モーツアルト
が大好きな私



私はクラシック好きでかつ大のモーツァルトファンです。特にモーツァルトについてはどんな些細なことでも知りたいと思っています。

私がモーツァルトを大好きになったきっかけの一つに1984年に製作された映画「アマデウス」があります。あまりにもショッキングなシーンで始まる映画で、それ以来モーツァルトが気になって仕方がありません。

モーツァルトの遺体があのように粗末に扱われ現在何処に埋葬されているかも分からない状態って凄くワクワクしてしまいます。ただ残されているのはあのすばらしい音楽だけです。あの映画を見て以来モーツァルトに対する考え方が変わりました。映画の中でのモーツァルトが本当にあのようにあつたらとても愛すべき男だと思います。天才であることは認めますが、とても人間的で好きです。

今もモーツァルトのピアノソナタを聴きながら書いていますが、モーツァルトの音楽は心に安らぎを与えてくれます。このようなすばらしい音楽を書く人間だからきっとすばらしい天才であると思います。しかし人間として本当にすばらしかったかと言う問いに対しては「ノー」と答えるのが私の中のモーツァルトに対する評価です。

世界中にモーツァルトを愛する人々が沢山います。皆自分が好きな人は全ての面で素晴らしい人間であって欲しいと、どんどん美化してしまうものです。私はモーツァルトがどんなに墮落した人間であっても好きです。いや自分としてはむしろこの世の中で最低の人間であって欲しいと思っています。

そしてそのような人間からの音を通した心のメッセージを聴きながら涙を流し言葉で言い表わせない美しさや優しさや勇気や望みをモーツァルトから得られればそれだけで満足です。

決して人間的にすばらしいモーツァルトは求めません。私と考え方が異なるモーツァルトファンからは非難轟々でしょうが、別にかまいません。モーツァルトは私の心の中にしか存在しないのです。

今聴いているイングリット・ヘブラーのピアノソナタは正にモーツァルトをそのまま表わす最適のピアニストであると思います。生演奏も数回聴きましたが毎回素晴らしいモーツァルトでした。私の信条は綺麗なまた純粹なところからは本当の美しさやピュアーなものは生まれないと思っています。だからこそモーツァルトが大好きなのです。

モーツァルトが大好きな私

私がモーツァルトを好きになった理由の一つのきっかけとして、今回お話しする映画「アマデウス」を見たことがあげられます。映画の題名はアマデウスとなっていますが、映画の中では当時のライバルであるサリエリというイタリア人の音楽家が、思い出を語りながら展開するストーリーとなっています。

この映画のビデオを米国へ出張した時に偶然に見つけ購入して見ました。そのころはモーツァルト以外にも多くの作曲家の音楽を聴いていましたが、この映画を観てからモーツァルトに対する見方が大きく変わったのです。この時点が今にして思うと私がモーツァルト大好き人間になるスタートとなった時でした。

それまでのモーツァルトに対する考え方は、美しい曲をすらすらと五線譜に書く天才であって人生的に苦勞せずに生きているのではないかと思っていましたが、この映画を見た後は、意外と生きる上で苦勞しているとともに、人間的にも普通の人間と同じようで親近感が持てるような感じを受けたのです。

特にモーツァルトが酒好き（モーツァルトはワインでしたが、私は日本酒です）や女好きの点は男として素直な感覚で受け入れられるものでした。また、あの18世紀における楽しみは貴族であろうと庶民であろうと、また男も女も他に何があったのかと思うのです。

これを契機にモーツァルトに興味を持ち、世の中に出版されている本やいろいろな文献を読んでいくにつれ、モーツァルトが好きになる一方でこの映画の中で展開されている史実的な信憑性に疑問を持ったのです。

明らかに誤っている点は、モーツァルトの助手であるジェスマイヤーの存在が出てこないし、サリエリがモーツァルトの家にスパイとして召使の女を送り込んだというようなこともないし、モーツァルトが未完で終わってしまったレクイエムの曲の依頼者はサリエリの指示ではないなどの点などです。

これらの点に関しては、映画を制作する上で必要となる全体の盛り上がりや効果を出すための演出であったと思います。モーツァルト自身に起こったもろもろの出来事に基づき、そこに脚色を加えてファンタジーのようなものにした映画と言うのが、映画「アマデウス」の本質だと思います。それはそれで見る価値はあると個人的に思います。

モーツァルト大好き人間は、この映画を見て憤慨したとの話をよく聞きますが、私はそうは思わないのです。ただ史実に基づかないものについては行き過ぎがあると思いますが、その他のモーツァルトの行動については、このようなモーツァルトであったら親しみがもてていいなあ

とってしまうのです。

モーツァルト中毒になってしまうと、何でもかんでも高尚であり一点の非の打ち所がないような人物に仕立て上げないと満足しない領域に入ってしまうますが、それは個人のこころの中でそのようなモーツァルト像を作り上げればよいのだと思います。

モーツァルトのことについてあまり知らない人に対しては、まずこの映画を見て全体の時代の流れやその状況を把握し、その中でモーツァルトと言う稀に見る大天才がどのように行動したかの概略を知りうる事が、大きなポイントとなると個人的に思うのです。

そしてさらにモーツァルトに興味を持った人が本格的に音楽を聴きだしたり、また生い立ちや人生そのものについて読んだりして、モーツァルトに近づいて行けばよいのだと思っています。

この映画は私にとってモーツァルトという人間に興味をもたすきっかけを作った映画であり、18世紀後期の世界の生々しい状況や貴族・宮廷のような上流社会の環境と一般の人の生活を再現しているとともに、当時公演されていたオペラの様子が窺え芸術的にも見所があるものだと思います。

というのも、映画の中での演奏はネビル・マリナー指揮のアカデミー室内管弦楽団と第1級の演奏であり、またオペラの場面は「ドン・ジョバンニ」が初演されたプラハのティル劇場が使われているので、歴史的な臨場感があります。

このようにこの映画は賛否両論ありますが、私としてはまず真剣に見ていただいてモーツァルトを少しでも身近に感じていただければ良いと思います。10数年前に米国で購入したビデオよりもDVDの方が画面は美しく音もクリアーに感じます。

ちなみに私はこの映画のDVDを2枚（といっても2枚目は新しい編集のもので1枚目には入っていないちょっとHなシーンがあります。）持っています。モーツァルトと付くものは何でも欲しくなってしまうので・・・困ったものです。

モーツァルトの血液型

日本人ほど血液型についてこだわる国民も多くないと思います。外国人にあなたの血液型は何ですか？と聞くと皆が皆、変な顔をして「それを聞いてどうするのかとか」、むっとして「個人に関して全く関係の無い事柄だから答えない」とか、反対に「自分の血液型を知らない」との答えが返ってきます。

何故日本人がこれほどまでに血液型に関心を持つようになったか分かりませんが、いろいろなところで話題に上る事柄です。おじさんはB型です。日本人の血液型の分布はA型、O型、B型、AB型でそれぞれ4：3：2：1の割合だそうです。ですから血液型ではB型は少数派的な位置づけです。

世界的に見るとO型、A型、B型、AB型の順番と昔何かで読んだことがあります。また、B型は遊牧民族の流れがあるとも読んだことがあります。このような先入観もあってか、自分での性格分析は二重人格で他人から束縛されるのが大嫌いでもがままな人間だと思います。

好きなことは徹底的にやりますが、嫌いなものは出来るだけ手を抜いています。また、こだわりの部分では徹底的に細かいですが、反面ずぼらでいい加減なところもかなりあります。大雑把でもあります。どちらかというに対極的な行動を取り易いと思っています。また周りの人に恵まれていると思います。

このように自己分析をしているのですが、同じB型の方がいらしたら聞いてみたいと思っています。ところで私の好きな作家五木寛之はB型、私の髪型の真似先は尊敬する指揮者である小澤征爾でありこれまたB型、そして最後に大好きな作曲家モーツァルトは何型だったのでしょうか？

彼の亡骸はウィーンの聖マルクト墓地のどこかに埋葬されていますが、今更掘り出してDNA鑑定を行うことはもはや不可能ですが、彼の行動様式等を分析するとなんとなくB型の臭いがしてくるのです。これについては漫画家の砂川しげひさや作詞家、いや現在は作家？のなかにし礼もそれぞれの著書の中でB型でないかと言っています。彼らははじめからO型とAB型はないとしています。

B型の根拠として、(I)モーツァルトは疱瘡に当時かかりましたがA型であればとっくに死んでいる。(II)膨大な量の手紙とその内容の冗長饒舌さとその転調の妙はB型。(III)即興演奏に強いという反射神経の持ち主はB型。(IV)おっちょこちょいの性格。早口で無駄口をたたいて周りのひんしゅくをかうのはB型。(V)女には目が無かった。燃え上がると手が付けられないB型。

いかがですか？モーツァルトはB型だと思いませんか？私はB型の男性とは合いますが、B型の女性は苦手です。はっきり言って男女の組み合わせでB型同士は最低ではないかと思えます。根拠は全くありませんが男女の駆け引きをする感覚として感じるのです。

ただし、男性は違います。五木の文章の流れるさまが大好きだし、小澤の演奏は暖かいし、モーツァルトは清々しいし、だから波長が合うのかも知れません。

モーツァルトは謎が多くてモーツァルトらしいのであり、あまり科学的に解明されずにベールに包まれていてそれぞれ個人が勝手に思い描けばいいのではと思っています。おじさんはB型なのでモーツァルトもB型と勝手に決め込んでいますが・・・

あなたにとってモーツァルトは何型だと思えますか？

「モーツァルトのドン・ジョヴァンニ」（アンソニー・ルーデル著）を読んで

先日アンソニー・ルーデル著「モーツァルトのドン・ジョヴァンニ」を読みました。この本はモーツァルトがプラハで「ドン・ジョヴァンニ」を作曲した際の様子を史実に基づいて書かれた物語です。

著者のアンソニー・ルーデルは、父親がオペラ指揮者のユリウス・ルーデルで、幼い頃からクラシック音楽に親しんで育った関係もあり、物語自体にダイナミックな音楽の流れが感じられ、一気に読んでしまいました。

希代の女たらしのドン・ファンイタリア語読みがドン・ジョヴァンニです。ドン・ジョヴァンニのオペラのあらすじは皆さん知っての通りですが、簡単に紹介すると、女大好き人間のドン・ジョヴァンニは女を誘惑するだけでなく、その父親まで殺してしまい、ついにはその報いで地獄に落ちるという意外と単純なストーリーです。

しかしモーツァルトの音楽を聴くと単なる色事師というのではなく、堂々としておりまた品があり豪快さや強引さのような男として身に付けたい魅力ある面を持ち、スケールの大きい人物のような印象を持ちます。

日本では「英雄色を好む」と言われるように何故か戦国時代の豪快な武士の姿が頭に浮かびます。このドン・ジョヴァンニは、神を恐れず改心もせず地獄も恐れない、どうしようもない不遜な男として描かれていますが、自分勝手に生きる生き方に憧れてしまう面があります。また各国で何と2065人の女性をものにしていくことで物語とはいえ大したものだと思います。

モーツァルトのオペラは全部で21ありますが、このうち2つは未完であとのひとつは楽譜が散失されている状態です。これらのオペラの中で、音楽的には「魔笛」、「ドン・ジョヴァンニ」、「後宮からの逃走」、「コシ・ファン・トゥッテ」が好きですが、話しの内容まで考えると今回の「ドン・ジョヴァンニ」が最も好きです。

さて、今回の「モーツァルトのドン・ジョヴァンニ」は、モーツァルトがこのオペラをプラハの街で作曲する際の背景や経過を、妻のコンスタンツェ、オペラの脚本家のダ・ポンテ、またこのオペラをより内容のあるものにするためのアドバイスを行う「ドン・ジョヴァンニ」さながらの人生経験をしているカサノヴァ等を中心に、1787年10月29日の初演に漕ぎ着けるまでの様子を、正に目も前で繰り広げられているように思える話しの展開で書かれています。

特にモーツァルトはこの時期、父親を亡くし一人で音楽に立ち向かわなければならない環境にいたとともに、妻コンスタンツェとの愛の倦怠等で悩んでいた時期でもあるのです。周りの人間の手助けもあり、モーツァルトは最終的に初演を無事に終え、一つの山を乗り越えたことで、そ

れ以降の創作活動にも大きく影響した出来事のオペラだったのです。

何と「ドン・ジョヴァンニ」の序曲は初演の前の晩に一気に作曲したものです。プラハでは好評だった「ドン・ジョヴァンニ」ですが、何故かウィーンではいまいちぱっとしなかったようです。

ウィーンに戻ったモーツァルトは宮廷作曲家に任命されましたが経済的には苦しく、それ以降オペラでは「コシ・ファン・トゥッテ」や「魔笛」等や美しいクラリネット協奏曲をはじめとする多くの名曲をこの世に残しましたが、生活は苦しくなる一方でした。

そして、なんと「ドン・ジョヴァンニ」の初演から4年後には、それも人から依頼されたレクイエムの作曲途中で35歳の若さでこの世を去ってしまいます。人生の儚さを感じてしまいます。

モーツァルトは地獄へは落ちなかったものの、何故か生き方は「ドン・ジョヴァンニ」に近かったのではないかと勝手に推測しています。この「ドン・ジョヴァンニ」ですが、来月10月に小澤征爾がウィーン国立歌劇場を引き連れた凱旋公演が東京文化会館で開演されます。個人的にとっても楽しみにしている公演です。

きっとモーツァルトと「ドン・ジョヴァンニ」が重なった形でこのオペラを観ることになるのではないかと考えています。今回はオペラを観る前に、このような作曲された背景の物語を読むことが出来たのは、理解を深くする上でも参考になりタイミングが良かったと感じています。

機会があればプラハの街をゆっくりと歩きながらモーツァルトが「ドン・ジョヴァンニ」を作曲した当時の雰囲気に入れることが出来れば最高なのですがね。

モーツァルトの死と妻コンスタンツェ

モーツァルト生誕250年の今年は、世界中でモーツァルトに関するイベントが行われたり、また関連する書籍の出版がされるなど、とても密度の濃い年になっています。また、各方面でモーツァルトの見直しがなされています。

今年のはじめには、モーツァルトの頭蓋骨の信憑性に関して、オーストリア公共放送はモーツァルトのものとされる頭蓋骨に対してDNA鑑定が施されたが、本物とは確認できなかったと報じています。

モーツァルトが埋葬されてから10年後に墓を掘り起こしてモーツァルトの頭蓋骨を見つけたとされていますが、そもそもモーツァルトが共同墓地の何処に埋葬されたかも分からないのに、よくもまあモーツァルトの頭蓋骨だと言えたものだと思います。

さて、今回はモーツァルトの死と妻コンスタンツェに関して信憑性の低い話をしたいと思います。モーツァルトの研究に関しては、他の音楽家よりも手紙や直筆の譜面が多く残されていることから、かなりの精度で分析ができると思われます。しかし、それでもなお現時点で不明な点が数多くあるのはどうしたことなのでしょう。

この背景には、どこかで情報操作を行っていた人物がいたとするのが適切な考え方だと思います。では、それは誰なのかと言うと、妻のコンスタンツェ以外に考えられないと思うのです。

コンスタンツェが、何故にそのようなことを行ったかといえば、モーツァルトの死後のビジネスを上手く進めて金儲けすることと、自分に都合の悪いことは歴史に残さないとする点にあったと思います。

ですからコンスタンツェは、極力不都合なものは全て破棄してしまったことと、モーツァルトが残した遺産に関しても、多分かなり隠して自分のものにしてしまっているのではないかと考えています。

一般的にモーツァルトの生活は借金で大変だったとか、モーツァルトはコンスタンツェを愛していたとか実しやかに言われていますが、事実は異なっていたのではないかと思います。モーツァルトは毎年かなりの収入を得ていましたが、無計画にまた不適切に支出されたことにより、苦しい生活を余儀なくされたのだと思います。

この背景には、確かにモーツァルトの派手好きな性格からの行為もあると思いますが、それ以上にコンスタンツェの男遊びも含めた浪費が大きな部分を占めているのではないかと考えています。

妻のコンスタンツェに関しては、悪妻論とそうでなく良妻であったとの説もありますが、モーツァルト死後のコンスタンツェの行動等を見ていくと、とても良妻とは思えない行動をとっています。

モーツァルトの死に際してコンスタンツェは、葬儀と埋葬に不参列であったことは有名な話です。当時、夫の死に際してはこのような行動をとるのが未亡人として普通であったとの社会習慣があったにせよ、モーツァルトが初めて恋に落ちたコンスタンツェの姉であるアロイージャが参列していたことを考えると、どうも腑に落ちないのです。さらに、コンスタンツェがモーツァルトの墓に足を運んだのが、死後17年たってからの事実も不自然であると思わざるを得ません。

このようにモーツァルトの死後の様子を知れば知るほど、何かモーツァルトの死の裏に隠された秘密があるような気がしてなりません。ですから、後世においてモーツァルトの死に関するいろいろな説が出てくるのだと思います。

しかし、事実の一つですから、それを知っているのはコンスタンツェであろうと思います。可能であれば、霊媒師を通してコンスタンツェに、真実を聞いてみたいと思うのは、私だけではないと思います。

モーツァルトと姉のナンネル

モーツァルトには一人の姉がいたことは有名です。その名は、マリア・アンナ・ワルブルガ・イグナーツィア・モーツァルトで愛称「ナンネル」で知られています。マリア・アンナとは母の名前と同じであり、ちょっと混乱してしまいますが、この時代は親子や親族には同じ名前や似た名前を付けることが日常茶飯事に行われていたようです。

父親のレオポルドと母親のマリア・アンナの間には7人の子供（3男4女）が生まれたが、生き延びたのは、なんと4子であるマリア・アンナ（通称ナンネル）と末っ子のヴォルフガングの2人だけだったのです。日本でも同じ様に昔は生まれても生き延びる事ができるのは少なかったのです。従って生きるという意味においては、現代よりも深くそして重い意味がそこには存在すると思います。

モーツァルトにとって姉にあたるナンネルですが、この姉も父親の音楽的な才能を受け継いでおり、小さい頃から父親のレオポルドはこのナンネルに対して、今で言うところの英才教育をしたようです。

父親のレオポルドは、7歳程の娘ナンネルに対してハーブシコードのレッスン用として約50曲程の小品を集め、音楽の基礎やまた楽典の勉強用として使うために特別に「ナンネルの楽譜帳」を編集したようです。この楽譜帳には1759年に編集された記録が付記されていて、ナンネルは死ぬまで離さず持っていたようです。現在はモーツァルト記念館に保存されているとのこと。

この楽譜帳の曲を弾くナンネルの片隅でモーツァルトはいつも聴いていたようで、3歳のころから音楽的な環境に恵まれていたため、吸収力の良いモーツァルトの頭はどんどんこれらの曲を覚えてしまい、3歳にして和音を弾けるようになりさらに5歳には曲が弾けたというから驚きです。

私が40歳を越えたときにピアノを一時期習い始めましたがなかなか上手くならない私に比べ、モーツァルトは物凄い成熟度で伸びていったようですし、即興演奏までしてしまうから驚きです。初めはナンネルに力を入れていた父親も弟のモーツァルトの方がより才能があると認識したことにより、教育方法をかえモーツァルトに力を入れるようになったことは有名な話です。

しかし、ナンネルも晩年にはピアノ教師をしながら生活していたこともあり、モーツァルトに比べれば才能は劣るかもしれませんが、当時のレベルで見ると高い力を持っていたと思われます。その証拠に1762年にウィーンで女帝マリア・テレジアの謁見の際に、女帝より大変高価な衣装を賜った話は有名です。ナンネルには白いレース飾りを凝ってほどこしたこはく織であり、さらにモーツァルトには紫地に幅の広い金モールをほどこした大礼服だったようです。このよう

なものを与えるだけ、2人の音楽的な才能が高かったことを現わしています。

その内に、世の中はモーツァルトの方に注目するようになって来ます。また、ナンネルの胸のうちには分かりませんが、モーツァルトとナンネルとの手紙のやり取りを見ている限りでは仲の良い姉と弟の関係が続いていたようです。しかし、モーツァルトが一人でウィーンに行き活動し、コンスタンツェと結婚する頃から、姉と弟の関係に少しひびが入って来るようになったと思われる。

特に姉のナンネルが1784年8月に母アンナ・マリアの生まれ故郷であるザンクト・ギルゲンの地方貴族であるベルヒルト・フォン・ゾンネンブルクと結婚する際にも、モーツァルトは結婚式に参加せず、父親のレオポルドだけだったようです。ただ結婚する姉に対してモーツァルトは手紙を書いて祝福しています。

この手紙には、妻として男に仕える方法について書かれており、弟からの手紙に姉はどのように反応したのかちょっと興味があります。結婚の相手は、すでに2人の先妻と死別し、5人の子供を持つだけでなく、ナンネルよりも15歳も年上だったようです。しかしその前にナンネルはフランツ・ディッポルトというザルツブルクの宮廷陸軍参事官からの求婚があったのを断っていたのも事実です。この男はナンネルより21歳も年上だったようです。

このようにナンネルは老いていく父を親身になって世話していた関係で婚期が遅くなったのかどうかは分かりませんが、結婚はナンネルが33歳の時であり、さらに相手はかなりの年上で子持ちとの結婚でした。幸せな結婚であったかどうかは本人しか分かりませんね。

ナンネルが嫁いだザンクト・ギルゲンという街は、ザルツブルクから30キロ程離れた小さな街で、当時の地方裁判所の後が現在のモーツァルト記念館となっており、またこの建物の横にはザンクト・ヴォルフガングという名の湖がありますが、モーツァルトとは関係ないとのこと。

2005年の1月にこの地を訪れましたが、雪に覆われているだけでなく人がまばらで寒村でした。ただし、夏は各地から避暑目的に多くの人を訪れるとのことでした。あくまでもっそりとした街で、モーツァルトゆかりの母と姉のナンネルンのポートレートがモーツァルト記念館の壁に描かれていたのが印象的でした。

結婚したナンネルは、1801年に50歳で未亡人となり、その後ザルツブルクに戻りピアノ教師として暮し、1829年に78歳で亡くなったとのこと。人間の幸せは何が幸せで何が不幸せなのか分かりませんが、偉大な弟のモーツァルトを持った姉のナンネルは、人前でしゃべることなく静かに弟を見守りそして、最後はモーツァルトの歴史編集に際して当時のことをい

ろいろ思い出しながら協力したとのことでした。

血のつながった姉と弟の関係は弟の死があってもずっと続くものなのだと思います。偉大なモーツァルトの影で、姉という優しくそして優秀なピアニストがいたことも我々は認識しておく必要があると思います。人はどのような場合でも、他人に支えられて生きているですから・

モーツァルトにおける旅とは

夏休みの時期は多くの方が休暇を利用して新たな土地へ旅に出かけることが多いと思われます。また旅といってもいろいろな形態があり、さらにそれぞれに目的が異なるものです。

一人で全く知らない土地を訪れることもあるし、秘密のカップルで二人だけの思い出の土地に赴くこともあるだろうし、楽しい仲間達とワイワイガヤガヤと行き先は特に重要でなく、親睦を深めることが目的の旅もあります。

そこで今回は、モーツァルトにおける旅とは、どのような位置づけにあったのだろうかということに関して考えてみたいと思います。モーツァルトについては、現時点で多くの書籍が出版されていてモーツァルトの生涯に関して細かく書かれているので、モーツァルトが幼少の頃から旅に出ていた事実は、多くの方には既に周知の事実になっていると思います。

これらの本によるとモーツァルトは35年間の人生の中で17回旅に出たとされています。また合計で3720日（10年2ヶ月と8日）を旅に費やしたとされています。人生のほぼ1/3を旅していたこととなります。モーツァルトが生きていた18世紀にこれだけ旅の占める割合が大きい人も珍しかったのではないかと思います。

今の時代は地球規模で交通機関が発達したおかげで、日本からモーツァルトが生まれ活躍したヨーロッパへはほぼ12時間で行くことが可能な時代です。ですから移動に要する時間は大幅に短縮されました。

しかし、モーツァルトの時代の移動手段は、郵便馬車に分乗して旅をするのが普通だったようです。当時は今のように舗装された道などはないし、現代の車のように乗り心地を向上させるためのショックアブソーバが付いているはずもなく、ひたすら地面からの衝撃に耐えなければならなかった辛い旅であったものと想像されます。

このような悪条件の中でも、モーツァルトは短い人生の中で17回も旅をしているのです。その背景には、いったいどのようなことがあったのでしょうか。これに関しては、大きく3つに分けることが出来ると思います。

一つは、幼少の頃の旅は、モーツァルトの神童ぶりを広く知らしめるための旅であったと思います。これは父親レオポルドの戦略であったことは間違いありません。二つ目は、モーツァルト自身の就職活動のためです。生まれ故郷のザルツブルクでは、モーツァルトの持つ才能を十二分に発揮できないので、他の土地でそれを実現しようとするものでした。

結果的には就職できずに、最終的には今でいうところの音楽専門のフリーターのような生き方

をウィーンで行ったのです。そして最後は、生きるためまたお金を稼ぐために公演活動のために各地に旅をしたのがモーツァルトの旅の概要だと思います。

このような状況を冷静に考えると、モーツァルトの人生って一方ではとても不運の連続のように思われますが、個人的な考え方からすると、モーツァルトは結構この旅を通じて人生を楽しんだものと思われます。

これらの中では、期待した仕事に就けなかったり、求愛した女性に振られたりと人生の辛さを味わっていますが、それにも増して演奏に関しては万人からその才能を認められたのですから、普通の人的人生よりは充実感は100倍以上あったのではないかと思います。

そしてその才能を認められた分だけ、就職先が見付からず悔しい思いに関しては普通の人100倍以上味わったことでしょう。ですから良い面と悪い面を足し合わせて総合的な評価をすると、どんな天才であろうがまた凡庸な才能の人でも最終的にはプラス・マイナスでゼロになるものなのです。

また、旅に関してモーツァルトは次のような言葉を父に宛てた手紙の中で残しています。「旅をしない人は（少なくとも芸術や学問に携わる人達では）まったく哀れな人間です。・・・凡庸な才能の人間は、旅をしようとしまいと、常に凡庸のままです。でも優れた才能のひとは、いつも同じ場所には駄目になります。・・・」

凡庸な才能の人間に関する生意気な書き方に、反発感はありますが、まあモーツァルトだから許せるものです。普通の人が出たのならその人の人格を疑ってしまいます。

このようにモーツァルトは人生のほぼ1/3を旅していたことから、旅先から父親や留守の家族に対して手紙を多く書いており、それが現在までに残っていることから、モーツァルトがどのようなことに関心をもちまた考えていたかが分かります。とても貴重なものだと思います。

一つだけ気になるのは、モーツァルトの手紙の中で、旅先の自然に関する記述が殆んどないのです。もっぱら人や音楽の内容なのです。自然の偉大な光景に関して、モーツァルトは音痴であったような気がしてなりません。人間が出来ていない証拠ですが、大天才の中に見出された弱点を認識することはとても愉快的ことです。

さて、この私もこの夏はモーツァルト生誕250年に合わせてどちらかと言うと物見遊山のお登りさんのようにツアーに参加してモーツァルトを体験してこようと計画しています。

癒しのモーツァルトについて

モーツァルトの音楽は癒し系だとよく言われていますが、本当なのでしょうか。個人的には癒し系ではなく、もっと心の奥底にまで簡単に入り込むような種類の音楽であると思います。

悪い言葉で言えば、悪魔の音楽とでも言うとも誤解を生んでしまいそうですが、それほどまでに簡単に人の心の中に、無意識の内に入って来てしまうのがモーツァルトの曲なのです。

先日、新聞の広告に「癒しのモーツァルト～脳を活性化させるモーツァルト効果～」と題して、モーツァルトの音楽を「心に効く」と言われる91作品を選び、そのうちの1楽章分を選んでCD12枚に編集した生誕250年記念のセット販売記事を読み興味を持ちました。

その中で12の分野のタイトルが非常に面白く思われたのです。それぞれ「朝のモーツァルト」「昼下がりのモーツァルト」「夜のモーツァルト」「やすらぎのモーツァルト」「胎教のモーツァルト」「リラックス・モーツァルト」「気分転換のモーツァルト」「ティータイムのモーツァルト」「ドライブのモーツァルト」「集中力のモーツァルト」「情熱のモーツァルト」「元気になるモーツァルト」とタイトルが付けられていて、それぞれのジャンルに該当する曲が、それぞれに8曲程度収録されているのです。

これらの中で、例えば私の好きなピアノ協奏曲第23番イ長調は「集中力のモーツァルト」に納められており、その他には次のような曲が集録されていました。①ピアノ協奏曲第20番二短調k. 466第1楽章、②アイネ・クライネ・ナハトムジークk. 525第3楽章、③フルートとハープのための協奏曲ハ長調k. 299第3楽章、④バイオリン協奏曲第5番イ長調k. 219第3楽章、⑤ピアノ・ソナタ第15番ハ長調k. 545第1楽章、⑥ピアノ・ソナタ第8番イ短調k. 310第3楽章、⑦交響曲第35番二長調k. 385「ハフナー」第4楽章、これらを見て該当する曲が集中力に関係するかどうか、ピアノの作品に関してのみ聴いて考えてみました。

まずピアノ協奏曲第20番の第1楽章ですが、確かに短調で始まり楽想は哲学的な雰囲気の中で進みますが、果たして集中力の分野なのか疑問です。どちらかと言うと哀しみの中から安らぎを見出し、少しずつ立ち上がるような気持ちになります。一般的にモーツァルトの曲は、どの曲にも聴いていても何かを考えさせるものをもっていますので、その意味からいえば哲学的であり、さらに突き進めば集中力にまで到達するのかも知れません。

次にピアノ・ソナタ第15番ハ長調の第1楽章です。この曲は1788年32歳の作品で、モーツァルト晩年の作品になります。「ソナチネ・アルバム」に入っているポピュラーな曲ですが、思うように弾くのが難しいのではないかと思います。

弾く人にとっては無心になって弾かなければならないので、結果的に集中力が上がるのだと思います。個人的に大好きなピアノソナタです。とても透き通っており、単純なスケールを弾くような箇所がいくつも出てきますが、これを自然に流れるように、さらに音の粒というのでしょうか美しい真珠のように一つ一つ繋ぎ合わせて表現するのは、並大抵のことではありません。聴いていて心が自然と軽くなり、最後にはわくわくしてくるから不思議です。

その次は、ピアノ・ソナタ第8番イ短調第3楽章です。この曲は人生の苦悩から這い上がろうとする、挑戦的な心の動きが感じられます。ピアノ・ソナタでは初めての短調作品で、どちらかというと悲劇的要素が含まれているような感じを受けます。想像ですが、パリで亡くなった母マリア・アンナの死と何らかの関連があるのではないかとも思えるものです。ですからこれも集中力とは関係ないと思われます。

最後は、私が大好きなピアノ協奏曲第23番イ長調です。第1楽章ですが、とても優しく安らかに澁みなく流れる旋律にうっとりとしてしまいます。明るく青い空を突き抜けるような感覚になります。そして聴きながら無心になり、モーツァルトの旋律にのって時間を超越した空間を彷徨いながら、最後にまた現実に戻ってくるような流れです。これはちょうど御釈迦様の手のひらから飛び出せないような、そんな感じになるのです。

以上のようにピアノに関しての曲だけを聴いてみても「集中力のモーツァルト」とはちょっと距離があるような感じを受けました。直球的な発想で言えば、素直で無心になれる感覚のモーツァルトだと思います。

モーツァルトはどの曲を聴いても、必ずその中にさらっとした透明感があり、決して強制的に押し付けるものがないのが特徴ですし、聴き終わった後に、自分でその時に感じた色を選択して塗るような気がしています。

モーツァルトの正しい聴き方は、今回のようにジャンルに分けて聴くのではなく、どのような心の状態でもモーツァルトの曲はその状況に合わせられるように、心の中に自然と入ってくるものなので、特に選ぶ必要はないと思っています。ですから始めから色を付けずに、何でも聴くことが重要ではないかと個人的に思っています。

モーツァルトの楽譜を見ながら感じたこと

2006年の年末にモーツァルトのホームページからモーツァルトの作品の楽譜が無料でダウンロードできる記事を読んで、この休みの間にアクセスし、いろいろ勉強しました。モーツァルトを個人的にこつこつと探求するにはもってこいのデータベースです。

今回いろいろと検索しダウンロードした楽譜は、私が大好きなピアノ協奏曲第23番イ長調K488です。以前からモーツァルトの作品の楽譜を手に入れその中身をこの目で見てみようと思っていましたが、なかなか楽譜を購入するチャンスがなく今日までになってしまいました。

昨年夏にザルツブルク音楽祭に出かけた時に自由時間を使って楽譜を手に入れようと思いましたが、モーツァルトが交響曲第36番「リンツ」を短期間で仕上げた都市であるリンツをどうしても訪問しなかったため、ザルツブルクで楽譜を購入する機会を逃してしまいました。

同じツアーの人がザルツブルクでモーツァルトのピアノ協奏曲の楽譜を購入した話を聞き、非常に悔しい思いをしました。帰国後、AMAZONで検索し、購入しようか迷っていた時に、インターネット経由で楽譜を手に入れることが可能であることが分かり、とても嬉しく思いどきどきしながらアクセスし入手しました。

さて、ピアノ協奏曲第23番の楽譜（pdf版で25Mの容量でした）をダウンロードし、印刷してモーツァルトの曲を眺めましたが、ベートーヴェンやその他の作曲家の楽譜と異なり、眺めた直感からは流れるようなイメージと優しさが自然と感じられました。

いままでモーツァルトの曲を聴くことはあっても楽譜をしっかりと見たことはなく、音符を一個づつ丁寧に見たのは今回が初めてだったので、その優雅な美しい音符たちを見ながら幸せ感を感じられ、自分でもちょっと驚いています。

また、楽譜を見ながら新たな発見とは、今まで気づかなかった音が埋め込まれていたことです。CDで聴く限りでは聴き取れなかったのですが、冒頭からピアノが左手でだけで9小節も弾いていたとは思ってもよらぬことでした。弦楽器によるあの優しい明るい出だしの旋律の裏で、ピアノのパートがあったとは本当に意外でした。

なぜにこのような音符を入れたのかは分かりませんが、素人で考えるとこの時代モーツァルトは弾きながら指揮をした関係で、右手で指揮をしながら最初の出だしとして、左手でラの音を弾きながらオーケストラ全体のテンポや強弱の調整を行ったのではないかと思います。

今回、インターネット経由でモーツァルトの楽譜を手に入れることが出来たので、今後はただ聴くだけだった取り組み方から、モーツァルトが書き記した楽譜を素直に読みながらモーツァルト

トが意図したものが何なのかを自分なりに分析できたら楽しいと思っています。

何事もそうですが、いろいろな切り口や見方を通してひとつの事象を見極めることが重要だと思います。今回は、単に楽譜をダウンロードして眺めたことを通じて、新たな取り組み方法が見出せたことは自分にとってラッキーだったと思っています。

モーツァルトの魅力

今年モーツァルト生誕250年でいろいろな場面でモーツァルトが取り上げられています。来年になったらどのような扱いになるのか興味のあるところです。何事も同じですが、ある時期を過ぎると本来の状態に戻るのです。このような現象を一般的にブームと呼ぶのでしょうか。

さて、日本においてモーツァルト以外でこのように注目される音楽家と言えばベートーヴェンくらいではないかと思えます。このような状況の中でモーツァルトの魅力とはいったい何なのかを考えてみました。

モーツァルトの音楽は、いつ聴いても新鮮、バックに流れていても邪魔にならない、同じ曲を何度聴いても飽きない、いつものメディの中にまたあらたな発見がある、どのような曲でも流れる感覚があると、個人的に分析しています。

いつ聴いても新鮮ということは、毎回同じメロディの中の、ある特定の箇所です。必ず心が引き付けられるだけでなく、その箇所で感じる感動が常に新鮮であることです。これは通常の生活の中では経験する機会は非常に稀なものだと思われます。

次に邪魔にならない現象ですが、何か重要な資料を作成しなければならない時などは、精神を集中させる上でも、音楽などをバックに流さずに行なうのが普通ですが、モーツァルトに関してはこのような状況の中で仮に音楽を流していても集中する際に邪魔にならず、反対にモーツァルトの流れに乗って新しい発想が湧いてくることが多いのも特徴です。

同じ曲を聴いても飽きないことは、多くの方が何度か体験していることだと思えます。特にモーツァルトの曲は何の抵抗もなく自然と心に入り込んで、そこに何らかの感覚を定着させているように思えます。

何度聴いても良いものはよいと素直に思えるし、曲の展開も細部まで分かっているにも係わらず、次の展開のメロディが流れ出すと不思議なことに初めて聴く曲のように感じてしまい飽きることがないのです。

またいつも聴いている曲にも係わらず自分の置かれている状況が普段と異なっていると、精神的な状況が違う場合は、今までに思ってもみないような新たな感動に浸る場合もあります。ここいら辺に何故かモーツァルトの隠されたもう一つの心を見出すことが出来るのではないかと思います。

モーツァルトの音楽は理屈で考えるのではなく、自然な流れの中で感じるものだと思います。モーツァルトは明るい曲想が多いと思われますが、この明るさの中に陰を感じますし、反対に短

調の曲の中に哀しみから抜け出す明るい光を差し込むような要素がきちんと織り込まれています。

ですからモーツァルトの曲を聴くと悲しい時あるいは落ち込んだ時などはそこから立ち上がるための勇気を与えてもらえるし、調子がよく万事が上手く行きそうな時に聴くと、そのような良い状態は長続きするものではないので、十分に注意するようにとの暗示を得るようなことがよくあります。

このようにモーツァルトの音楽は、モーツァルトの人生そのもののように感じられます。これは天才モーツァルト自身でさえも、耐え難いいろいろな経験乗り越えて来たので、これらの経験のエッセンスが音符の裏に全て書き込まれているのです。このような天才のメッセージの中に刻み込まれた重要なものに接した時に、人は大きな感動を得るのだと思っています。

モーツァルトの魅力は、このようなところにあるのではないかと個人的に密かに思っているこの頃です。

モーツァルトとイタリア旅行

モーツァルトは、36年に満たない短い人生の中で10年2ヶ月、つまり人生の約3分の1を旅先で過ごしたのです。さらに現在残されている手紙等から判断して18回も旅に出ています。訪れた場所は9ヶ国、約200都市にもなるようです。

今から250年も前の時代に、それも交通手段が今のように充実していないときに、これだけの都市を訪れることが出来たのは驚きの何ものでもありません。今のグローバル時代に照らし合わせて考えても、人生の3分の1を旅先で過ごすことは非常に難しいことと思います。

18回の旅の中でモーツァルトにとって大きな影響を与えた旅の一つとして、1769年12月に父と供にイタリアに旅立ったことが挙げられると思います。さらに73年までに計3回もイタリアを訪れています。この事実からも当時の音楽はイタリアが主流であったことが窺えます。

宮廷や歌劇場ではイタリア人の楽長や作曲家をこぞって採用していたことから、当時の音楽界はイタリア人が幅をきかせていたのです。従って、音楽で成功するにはイタリアで名声をあげる必要があったのは事実だと思います。

ビジネス志向の強い父親のレオポルドは、才能ある息子のアマデウスをイタリアでデビューさせ、一躍有名にさせたいと虎視眈々とチャンスを窺いながら、イタリアの各都市を廻り貴族や有力な商人等に売り込みをしていたのだと思います。

そして機会あるごとに演奏会を開き、その内容の素晴らしさは誰もが認めるものであったので、その評判が評判を呼んでイタリア中に拡がっていき、全てが良い方向に進み、モーツァルトは時の人になっていったのは事実です。

この旅の中で有名な話としては、ローマの聖ペテロ大聖堂を訪れた際に、それまで門外不出の秘曲といわれたアッレグリの9声部の合唱曲「ミゼレレ」を一度聴いただけで覚えてしまい、帰宅してから楽譜に写し取ったというエピソードはあまりにも有名ですが、1回だけでは全てを正確に覚えていない部分があったので再度聴きに行き、完全なものにしたとの話が事実のようです。

何事も天才に関連することは、時が経つにつれて多くの事実を美化する傾向にあるので、大袈裟に表現されることが普通です。全てを単純に事実として受け入れるのではなく、自分なりに疑問をもって対応することが、どのような場合でも重要だと思います。

また、この旅の中で、当時最大の対位法の理論家で神様とあがめられていたボローニャのマルチーニ神父から、対位法の指導を受けていますが、その複雑な技法をいとも簡単に習得出来

たその才能は素晴らしいと思います。

いろいろな面でこのイタリア旅行は、物心両面でモーツァルトに大きな糧をもたらしました。1年4ヶ月に及んだこの旅行は、彼の生涯の中で最も充実したものであったと言えます。その後、イタリアを2回訪れましたが、職を得るという目的は達成されずに、やがて貧窮に陥り数々の苦難に見舞われることになるのです。

このような意味からも、モーツァルトのイタリア旅行は、モーツァルトの人生を大きく変える転機となったものであり、この旅があったからこそ、現代に生きる我々は、モーツァルトの最高の音楽を聴くことが出来ているのだと思います。仮にイタリアで職に就くことが出来たとしたならば、ひょっとすると現在名曲といわれているピアノ協奏曲や、交響曲、オペラ等の作品を聴くことが出来なかったかも知れません。

最終的には、モーツァルトにとって最高の結果が得られなかったイタリアの3回の旅でしたが、この時経験したいろいろな思いが詰まった旋律は、20年後に最高のオペラアリア等となって開花することを考えると、人間の人生の機微を感じます。

このようにモーツァルトの人生に大きな影響を与えたイタリア旅行ですが、個人的にも興味を持ち始めたので、今後この分野のことをいろいろと調べながら、いつかモーツァルトが訪れたイタリアの都市をそっと訪れて、その当時のモーツァルトの心を再現し、自分なりに共感してみたいと思いました。

モーツァルトは「注意欠陥多動性障害（ADHD）」であった

モーツァルトに関して、偉大な作曲家であることは一般的な事実です。しかし、本当のモーツァルトの姿に関しては、意外とベールに包まれている部分が多いのも不思議であり、反対にいろいろな憶測が飛び交う要因ともなっています。個人的には、モーツァルトは現在までに伝えられている内容よりも、もっと泥臭い生き方をした人物だと思っています。

偉大な天才で在るが故に、いろいろと不都合な行動や考え方の部分は過去の記録から抹殺されたのだと思います。人間は良いところだけを持ち合わせて生きられることはなく、何かしらの問題を持ち合わせながら生きているのです。もっともっとモーツァルトにとって都合の悪い事実がでてくると、モーツァルトが持つ本当の音楽の意味がさらに分かるのだと思います。

最近読んだ本で「モーツァルトが求め続けた「脳内物質」」がありますが、この本はモーツァルトが「注意欠陥多動性障害（ADHD）」と呼ばれる病気であったとしています。

この病気は、多動性、不注意、衝動性を主な症状とする発達障害で、注意力を維持しにくく、時間感覚がずれており、情報をまとめることが苦手とされています。この障害を持つ子供は飽きやすく、直に新奇な刺激を求める傾向にあるとされています。

この原因として脳内物質のドーパミンの機能に関する遺伝子の変異に関連しているのではないかとされている説があるようです。また反面でモーツァルトは少年時代にてんかん症を患っていて、後に統合失調症を発症したのではないかとこの本の著者は述べています。

モーツァルトはドーパミンが少ない病気であったので、それを補うために心地よい音楽を作曲し、脳内のドーパミンが増加するようにしたのではないかと推測されています。仮にこの仮説が正しいとすると、心の弱った人にモーツァルトの音楽を聴かせると回復するとか、モーツァルトの音楽を聞かせた牛の乳はおいしいとか、果実が甘くなるとか一般的に言われている事実が全て解決すると思います。

個人的には、モーツァルトがどのような病気であり奇怪な行動をとった人間であっても、モーツァルトの音楽は好きであることに変わりはありません。また浪費家で女好きな男であったと影で言われていますが、全て事実であると思いますし、反対にとても人間ぽくて好きです。

人間なんて完璧な人間は存在しないと思いますし、仮にいたとしたら人間としての存在意義がないと思います。常に不完全な中でいかに良くして行くかを悩みながら生きるのが人間に与えられた試練だと思うのです。

モーツァルトを完璧な天才人間に祀り上げるのではなく、泥臭い人間としての中からあのように

な美しく哀しい音楽を作り上げた偉大さを言い広めるべきだと思います。モーツァルトは「注意欠陥多動性障害（ADHD）」であったことはモーツァルトファンとして、非常にうれしい事実です。

このような事実を知った後に再度モーツァルトを聴くとまた異なった真実を発見できそうで、わくわくしてしまいます。皆さんはどのように感じられますか？

モーツァルトと五木寛之と哀しみと歓び

モーツァルトと五木寛之は、個人的に尊敬する音楽家と作家です。それぞれ生きている時代が全く異なるのに、個人的には何故か非常に似通った考え方や生き方をしている人物だと興味深く思っています。

モーツァルトは万人が認めるところの天才音楽家です。あの天使の歌のような美しいメロディや明るい中にこめられた深い深い哀しみは、他の音楽家に真似のできるものではありません。また、決して途切れない楽想の流れは、正に澱みがない自然な姿そのものです。

多くの人は、モーツァルトは明るく楽しい音楽を作る作曲家だとの思いが強いと思います。個人的にもそのような一面があることは認めますが、本質的にはどの曲にもその裏には途方もない哀しみが込められていると思っています。

物事の本質には必ず両極端な状況が存在します。例えば、喜びと哀しみ、善と悪、明と暗、男と女、真と偽、生と死など挙げれば限りありません。しかし、このような両極端な状況はそれぞれ紙一重のようにして存在しているものだと思っています。ですからあの偉大な釈迦でさえも、人間が死んだらどうなるのかを語っていません。これらは全てが「空」の考えあるいは中庸の考えに帰着するのではないかと思います。

モーツァルトの音楽も同様で、殆どが長調で書かれていることから聴いただけでは明るくのびのびとそして安らかな幸せ感を感じますが、本当にそうなのだろうかと思うのが最近の個人的な疑問です。モーツァルトはどちらかというとな面的な面で判断してはいけないと思います。常に逆の面から見て聴く必要があるのではないかと思います。

長調であれば暗い哀しみをもって、また短調であればこれから開かれる幸せな希望を持って聴くことが必要だと思うのです。純粋なモーツァルトファンやモーツァルト研究家からは非難されるかも知れませんが、個人的には非常に真面目に考えています。

何しろモーツァルトは極端な考えや奇抜な行動を平気で行う人間だとの認識に立っています。ですから、モーツァルトは変人だったと個人的に断言してしまいます。変人の作品は、変人なりの考え方をもって聴くべきなのです。

このようにして聴くと、モーツァルトの曲はまた新鮮な音楽となって聴こえて来るから不思議です。是非とも試しに反対の切り口から再度モーツァルトを聴いていただければと思います。底が抜けるような明るく透明感のある曲は、実は途方もない人間の深い深い悲しみがいっぱい詰まった曲であることがきっと分かっていると思います。

次に作家の五木寛之に関してです。この作家も変わった人だと思います。文章はモーツァルトのように流れる文体でそれも非常に明解に、誰にでも容易に分かるように書かれているので、私のような者にとっては読んだ後にそのポイントがきちんとされるので非常に尊敬しています。物事を平易に書き下し、本質をきちんと伝えることができる作家は世の中にさほど多くいないのが実態です。

一般に五木寛之の考え方は、暗くネガティブであると評価されています。しかし、私は先程のモーツァルトではないですが逆に考えて読んで欲しいのです。本当は明るい未来や希望がぎゅちりと詰まった表現をそれぞれの暗い考えや言葉の中から感じられると思います。

個人的にはいつも読み終わった後は、モーツァルトの音楽を聴き終えたときのように爽やかにそして頑張ろうとする思いが心の中から沸いて来るのです。そして勇気付けられるから不思議です。

このように現世というものは、両極端のものが同時に存在する世の中であることが我々を悩ますことになるのだと思います。哀しいときには嬉しさを、希望を感じたときはその裏の絶望を意識することが必要なのです。このことを理解すると、中庸や「空」という考え方に近づくことが出来るとともに、物事の本質に迫ることが可能となるのです。

即ちモーツァルトは哀しく聴き、五木寛之は希望を持って読むことがバランスの取れた感覚で、冷静に体験することが出来るのだと思います。

モーツァルトとオランダとパイプオルガン

モーツァルトの35年という短い人生の中で、その約1/3に当たる10年間は旅に出ていると言われていています。旅は人間にいろいろな体験や教訓を与える良い機会だと思います。事実、モーツァルトもこの旅を通じて多くの事を学んだとされています。今回は、モーツァルトとオランダとの関連を少しお話ししたいと思います。

個人的な話ですがオランダには、15年程前から約3年間の間に仕事の関係で5～6回訪問しました。とても静かでゆったりとした運河の街で、建物もレンガ造りで趣きと歴史を感じさせる街でもあります。チューリップ等の花が豊富でまた、海の幸も美味しいところです。

特に地元の人に連れて行ってもらったレストランで初めて食べたムール貝は、本当に美味しかったです。また、街のある一角には「飾り窓」とよばれる独特な雰囲気のある大人の世界の地域があり、男にとっては刺激的な街でもあります。

さて、モーツァルトは、人生のなかで2度ほどこのオランダを訪れています。2度ともロンドンへの行き帰りに立ち寄ったものです。初めは、1765年9月10日にモーツァルト一家は、アントワープからロッテルダムを経て、オランダの首都デン・ハーグに着き、当時のオランダの大公であるオランニエ公に謁見した記録が残っています。また、モーツァルトは、「ヴァイオリンの伴奏を伴うクラヴィーアのためのソナタ K26-31」を作曲し、オランニエ公の姉に当たるヴァイルブルク7妃に献呈したとされています。

また、翌年の1766年3月にはロンドンからの帰りに再度オランダに立ち寄り、運河の街であるアムステルダムでコンサートを開いたりしています。このころのモーツァルト一家の約1ヶ月間のアムステルダム滞在の様子はよくわかっていません。しかし、家族でアムステルダムの街を歩いたことでしょう。どのように過ごしたのか、とても興味深いものがあります。

さて、今回はモーツァルトがこのオランダを訪れた時に弾いたとされるパイプオルガンが残っている教会があるとの事を聞き、当時この街を訪問した時のことについてお話しします。この街はハーレムと言い、アムステルダムから西19キロにあります。ハーレムというとアメリカのニューヨークを思い浮かべますが、ニューヨークのハーレムはこのオランダのハーレムの名前をとって名付けたとの事です。

このハーレムですが、アムステルダム中央駅から鉄道で15分程度の所にあるレンガ造りの家並みが続く古い街です。また、隣の街にチョコレート工場があることから、風向きによってチョコレートの匂いが流れて来ることがあるなど、ちょっと優雅な雰囲気のある街もあります。

また、オルガンが盛んな音楽の街でもあり、特にハーレムの聖バフォ教会には10歳を迎えた

1766年の4月の初旬にモーツァルトが弾いたとされるパイプオルガンがあります。さらにモーツァルトだけでなくヘンデル、サンサーンスも弾いたとされています。このようにオルガンが有名であることから、多くのオルガニストが住んでいるようです。

この聖バフォ教会では夏の間だけ毎週火曜日に開かれるパイプオルガンコンサートがあります。私が訪れた季節は夏ではなかったので、このようなチャンスに巡り合うことはありませんでしたが、とても素晴らしい教会でありかつパイプオルガンも特徴のあるもので、荘厳な姿で迎えてくれました。

モーツァルトが弾いたとされているオルガンを見た時に感じたのは、実際にモーツァルトがどのように弾いたのかまた、何を弾いたのだろうかということです。残念ながらこれらの記録はなく、内容が分かりません。10歳になったばかりのモーツァルトですから、ある程度の想像は付きますが、大人がびっくりするような弾き方だったのは確かだと思います。

ただ、時という時間の流れはどうしようもありませんが、モーツァルトが弾いたパイプオルガンを目の前にして、その物理的な空間だけを共有できたという喜びだけが心の中にありました。また聖バフォ教会のオルガンを使って演奏したCDが教会で販売されていたので無条件で購入し、後日モーツァルトを思い浮かべながらオルガンの音色に聴き入りました。

その後、モーツァルトは故郷であるザルツブルクに帰り、2度とオランダに立ち寄ることはありませんでした。モーツァルトとオランダとの関係はモーツァルトが訪問した国々の中では、あまり目立たない存在の国となっていますが、現在でもモーツァルトが弾いたオルガンが現存するのを見て、ちょっと感激した次第です。

モーツァルトとジャズについて

先日たまたまTVを見ていたら昨年5月に開催された第11回宮崎国際音楽祭の様子が放送されていたので見ました。音楽を聴いたというよりは、TVですから見たというべきだと思います。

音楽祭の内容はモーツァルトのピアノ協奏曲第9番変ホ長調「ジュノム」K271で、ピアノが小曾根真でした。後で分かったことなのですが、小曾根真はなんとジャズピアニストだったのです。また、指揮はシャルル・デュトワで演奏が宮崎国際音楽祭管弦楽団でした。

TVを見ながら聴き慣れたモーツァルトの「ジュノム」がいつもと違う感覚なので、ちょっと違和感がありました。さらにびっくりしたのは、カデンツァの部分に突入した時点でいつものカデンツァではなく、明らかにこのピアニストによる即興演奏だと分かったことでした。

モーツァルトのカデンツァでピアニストのオリジナリティを出して弾くピアニストは、私の知る世界ではフリードリヒ・グルダくらいしか思い浮かばぬほど稀なことだと思います。聴いてさらに分かったことは、モーツァルトの主題の欠片は確かにその奏でる中にあるのですが、全体の流れが明らかにジャズ系による異なる感覚に支配されているのです。

この時点で初めて小曾根真というピアニストが、ジャズ系の人ではないかと思い始めたのです。反対にそのような聴き方で聴くと、演奏にスリルがあって面白いと感じられる箇所がいくつもありました。

個人的にジャズ分野に関する事を全く知らないので何ともいえませんが、モーツァルトの澄み切ってかつ流れるような音楽を、ジャズの領域に引き込んで演奏するのは非常に難しいと思いましたし、反対に冒険ではないかとも思いました。

以前にバッハの音楽をジャズ風に演奏するのを聴いたことがありましたが、この時は全くといって良いほど違和感が無かったのですが、さすがに今回のモーツァルトの演奏のそれもカデンツァの部分だけをジャズ風にするのは問題だと思った次第です。

もっと言ってしまえば、カデンツァの部分だけでなく、全体的な捕らえ方が既にジャズになっているような演奏の仕方でした。

さて、バッハの音楽はポリフォニー主体の音楽といえますが、モーツァルトの音楽は、モーツァルトが生きた時代の流れを考慮しても殆どがホモフォニーによる音楽なので、ジャズ化にあたって条件が異なると思います。

ホモフォニーとは、和声的な様式の音楽を指す音楽用語であり、内容的には主声部の旋律に対して伴奏をつけたものといえます。ですから作曲者が主旋律と形式の区別を明確にすることが出来ます。

これに対してポリフォニーとは、複数の異なる動きの声部が調和しながら進行する音楽で、ホモフォニーのように主旋律や伴奏といった区別がなく、どの声部もほぼ同等の比重で絡み合うものです。

このポリフォニーは、中世西洋音楽期～ルネサンス期にかけてもっとも盛んに行われ、あの大バッハもこのポリフォニーの権威として貢献しましたが、バッハがライプツィヒで活躍していた時期に、ホモフォニーへの大きなうねりが起こりました。当然のようにバッハもこれを吸収し作品に生かしましたが、本質的に彼の手法とはしませんでした。

このように音楽の大きな流れの中で、モーツァルトの作品もそれに伴って変化していきますが、どちらかというところ、フーガ技法が苦手だったモーツァルトの音楽をジャズの領域で扱うのは、2つの音楽の領域の融合性が低い中で行われるので、どうしても無理が出て来てしまいますし、モーツァルトの音楽の中で最も重要と個人的に判断している自然な流れが、阻害されてしまうと思うのです。

変わった演奏を聴くという目的であれば全く問題ないですが、今回の音楽祭の演奏を聴いて素直に感じたことは、モーツァルトの音楽を真剣に聴くという立場からは、モーツァルトをジャズ化することには大きな疑問を感じました。

モーツァルトと自然観

モーツァルトは稀にみる大天才であり、あと数百年間は同じような天才は出てこないのではないかと思います。確かにモーツァルトの音楽は透明感があり、何処をとっても美しく、また自然に流れており、無理やりつなぎ合わせたところがない音楽です。

これほどまでに転調を上手くしながら曲に膨らみを持たせ、澁みなく流れる天使の音楽を作曲できるものはいないと正直に思います。しかしこの背景には、父親であるレオポルドの教育方針があった事実を見逃すことは出来ません。今で言うところの教育ママならぬ教育パパがモーツァルトを育てたのです。

このように父親の影響が大きかったモーツァルトは、普通の子供が育つような環境の中で幼少の時間を過ごしたのではなく、常に大人の世界の中で育って来たのです。ですから、大人になったときにその反動が大きく出てくるのも仕方のないことだと思います。三つ子の魂百までと言われるように、何事も小さいころから専門家になるための基礎を身に付けさせなければ、その後大成する可能性が低くなるのは明白な事実です。

人生の殆どを大人の世界で育ったモーツァルトは、一般のこどもと異なる点が多いのではないかと思います。よく言われるのは、とてもませていたということです。最も良い例はウィーンでのあの有名な出来事を見ると分かります。

それは1762年10月モーツァルト6歳の時、両親と姉と召使と一緒にウィーンに行き、女帝マリア・テレジアに謁見を賜り御前演奏をした際の出来事です。こともあろうに演奏後、なんとあの女帝の膝の上に跳び乗り、その頬にキスをしたと言われています。

さらに、モーツァルトが宮殿の床に滑って転んだ時に、ほぼ同い年のマリー・アントワネットが駆け寄って起こしてくれたそうですが、モーツァルトは喜んで「あなたはいい人だ。大きくなったらお嫁さんにしてあげる」と言ったそうです。

この感覚は何処から来るのでしょうか？精神的あるいは心の中で考える範囲はこどもそのものなのですが、常に接している大人の世界の言葉で話してしまうのではないかと思います。これはこどもの感覚ではなく、既に早熟なモーツァルトの現れであろうと思います。今の世の中でも常に大人の世界で育った子供にこのような傾向があるのも頷けます。悪く言うと子供らしさがないのです。

また、「僕が無駄口をたたいたすべての女性と結婚しなければならないのだとしたら、僕は200人もの妻を持たなければならないでしょう」と、モーツァルトは言っています。このことから分かるようにモーツァルトは女性に気安く声をかける軽い性格だったようです。この点は男と

して納得できるのですが、モーツァルトは変わった人間だったのではないかと考えざるを得ない気になる点が一つだけあるのです。

人生の中で10数年という長い時間を旅とともに過ごしたモーツァルトです。この時代の他の人間に比べると、桁違いにヨーロッパの主だった都市へ旅をし、いろいろなものを見たり聞いて見聞を広めていることは確かなのですが、その旅の中で書いた書簡には、大自然の雄大さや素晴らしさ等に関してほとんど書かれていないのです。とても不思議です。

普通の人間であるならば、西の空に沈む夕日を見た時とか、アルプスのような雄大な山々の姿を見た時に何かしら心に響くものがあると思うのですが、その印象や驚きに関して何も書かれていないのです。意外とモーツァルトは自然のような視覚に入るものに関して無関心であったのかも知れないと判断するのは、行き過ぎでしょうか。

一方で、その自然に対する無関心の部分に対するものは、全て音に代わってモーツァルトの頭に記憶されたのかも知れません。極端な言い方をすると、自然の中から大きな「気」のエネルギーを得て、それらを蓄積していたのかも知れません。

よく言われていますがモーツァルトの作曲方法は、ピアノを殆ど使わなかったとされています。何故ならば頭の中に自然とメロディが流れて来るだけでなく、その速度は自分で楽譜に書くのが追いつかないほどだったといわれています。

楽想は全て頭の中で行い、恐ろしいほどの集中力で曲の構想を作りあげ、構想が固まると一気に楽譜に書いていったようです。この集中力こそが、自然の「気」と同期されているのではないかと想像してしまいます。ですから、モーツァルトは自然を視覚でみたのではなく「気」の流れで捉えていたのではないかと考えてしまいます。

天才モーツァルトですが、いろいろなところに意外な面を発見する事ができ、天才であるがある面では私と同じ凡夫の面を併せ持っていることから、親近感を覚えるのは私だけでないと思います。モーツァルトは大天才ですが自然を見ることに関しては、音楽でいう大音痴だったようでとても愉快です。モーツァルトには自然を思う自然観を持ち合わせていなかったのかも知れませんがね。

それに比べ、凡夫は真っ赤な夕日を見ても感動するし、桜の花が一気に散っていく様をみて人生の儚さを感じるなど、モーツァルトよりは自然観が豊かなので少し安心しています。

バッハ、ベートーヴェン、ブラームスとモーツァルト（3B+M）

12月24日はクリスマスイブです。世の中ではクリスチャンでないにもかかわらず、多くの人がクリスマスイブを楽しんでいます。背景には日本人の多様性というか何でも受け入れる民族の考え方があると思います。この時期はクリスマスに関連する歌や曲が巷に流れクリスマスの雰囲気盛り上げるのに一役も二役も担っています。

クラシックでは、この時期によく演奏されるのがバッハのクリスマス・オラトリオです。この曲は1734年12月下旬から翌年の1月上旬までのクリスマス期間に、東ドイツのライプツヒにあるトーマス教会で公演するために書かれたもので、カンタータ6曲からなる一連の作品であり、キリスト生誕の物語を4人のソロと合唱によって歌われるものです。明日の晩はクリスマス・オラトリオを聴きながらバッハを再認識してみようと思っています。

さてクラシック音楽のなかで、3Bとはバッハ、ベートーヴェン、ブラームスをさします。今回はこの3人に対する簡単なコメントを整理し自分の中の整理をしたいと思っています。

バッハの曲はよく宇宙の広さに例えられますが、厳粛な中にぽっと暖かくなるような感じがします。音楽の父と呼ばれるだけあって偉大な作曲家ですが、一方で子供の教育のために平均律クラビア曲集が書かれました。個人的な感想ですが教育用とは思えないほど芸術性の高いものになっており、特に第1巻が大好きで、リヒテルの演奏で聴くとこれまた最高です。

バッハが得意としていた対位法ですが、モーツァルトはこれらをイタリアで学びましたが、あまり得意ではなかったようで後日バッハを勉強し直しています。整然とした中での調和のとれたバッハの手法と天衣無縫の楽想であるモーツァルトとの作品は同じ土俵で論じられるものではないので両者の優劣論議は無意味ですが、個人的にはやはりモーツァルトに軍配を上げてしまいます。

さて毎年の暮れには恒例のベートーヴェン交響曲第9番合唱が全国のコンサートホールで演奏されますが、このような慣習は日本独自のものです。新たな年を迎えるにあたりベートーヴェンの合唱を聴きその年の反省とまた翌年の決意を整理して年を越すことは、けじめ上からもよいことだと思います。

また、ベートーヴェンの曲ですが若い頃は聴くエネルギーがありましたが、この年になるとちょっと疲れます。ですからこの1年間で聴いたベートーヴェンはほんの数回だけです。昔を考えたらとても想像がつかない行動です。

人間って本当に不思議だと思います。大好きだから絶対に変わらないと思っても、全宇宙規模で考えた場合でも、この世界で不変で変わらないものはないのですから、煩惱の塊である人間な

らなおさら変わらない方がおかしいのです。ですから、言い訳ではありませんがベートーヴェンに対する思いは昔に比べると薄らぎました。

さて、3Bの最後は劣等感の塊であったブラームスです。ブラームスの楽想には人間の弱さやかすかな希望、さらにゆっくりと伝わってくる暖かさがあります。どの曲も燻し銀のような楽想ですので、本当の良さを味わえるようになるには、ある程度の人生経験が必要だと思います。

特に苦しく辛い人生経験をした人がブラームスを聴くと、真っ暗闇の中に小さなマッチの火が点るようなそんな喜びが感じられると思います。これはブラームスの性格と人格がこのような楽想を書かせるのだと思います。昔からいままで変わらずにとっても好きな作曲家です。

ベートーヴェンは疲れますがブラームスは疲れません。それは曲の中に流れるものが異なるからだだと思います。ベートーヴェンは純粋な理想論者であるのに比べると、ブラームスは人間の泥臭い部分を大切にあるいはそれを捨てる事ができなかった民衆派的哲学者だと思います。ですからそのような状況にあった人には、ブラームスの音楽は心の琴線に触れること同じなのです。

このように3Bと呼ばれる作曲家はそれぞれに特徴のある人物ですが、個人的にはやはりモーツァルトです。バッハもベートーヴェンもまたブラームスも越えた、どちらかというとも全く異なる次元での存在だと思います。その意味では大天才というか全宇宙のエネルギーを自由に使いこなすことが出来た超人だと思っています。

モーツァルトですが、暮れに聴く特別なものはないのですが、個人的には12月5日に没したモーツァルトの霊を慰めるために、モーツァルトのレクイエムでも聴きながら過ごそうと思っています。

毎日がモーツァルト

2006年はモーツァルト生誕250年でいろいろな場面でモーツァルトに出会う機会が多い年です。コンサートでも書籍でも今年ほどモーツァルトを取り上げて一色に染まる年はないと思います。個人的には、今年はある機会を捉えてモーツァルトに浸ろうと決め、いままでにいろいろな取り組みを行って来ています。

今年から取り組んだものの始めとしては何と言ってもiPodを購入したことです。そしてモーツァルトだけの曲を入れ毎日通勤時間帯や愛犬ミルクの散歩あるいは移動時間等で聴いて、毎日モーツァルト漬けになっています。しかし不思議なことに毎日聴いても新鮮であり飽きがこないところがモーツァルトのもう一方の素晴らしさだと思います。

さてお次は今年の正月にDVDレコーダを購入し、NHKのBS2で月曜日から金曜日まで放送している「毎日モーツァルト」という番組を録画しています。この番組はモーツァルトが残した曲の中から240曲を厳選して、毎日1曲ずつモーツァルトの生涯に係わるエピソード等を交えながらモーツァルトの立ち寄った都市等の美しい映像をバックに流しながらモーツァルトの魅力を探る番組です。録画したものは日曜日にまとめて1週間分観て楽しんでいます。番組の題名どうり、毎日モーツァルトです。

その次はモーツァルトに関する書籍を読破することです。毎週1回は書店に行って新刊書をながめています。これらの中にはモーツァルトに関する書籍も多く発刊されていますが、それぞれを手にとって中を見ると、それらの殆どがモーツァルトに係わる入門書的なものが多く、もう少し付加価値の高い書籍を発刊して欲しいと思っています。

特に興味を持っているのはモーツァルトが亡くなる1791年の1年間であり、この期間をどのように過ごしたのかを著した「モーツァルト最後の年」という書籍を購入しましたが、まだ読み始めていません。この本は今年1年かけていろいろなモーツァルトを自分なりに受け止めた後の最後の最後に読もうと思っているからです。きっとモーツァルトの哀しみが伝わってくるのではないかと勝手に思っています。

書籍の次はCDになります。現在モーツァルトに関するCDは約200枚程度持っていると思いますが、まだ全ての作品を収集していないので、この250年を記念したCDが発売されるのを機に、ない作品を収集しモーツァルトの作品全曲を鑑賞できる環境を作りたいと計画しています。

そして今年実行したいのは、海外から多くのオーケストラが来日しモーツァルトを演奏しますが、出来る限り足を運んでモーツァルトを聴こうと思います。先日はNHKから今年秋に開催される「NHK音楽祭2006 体感！モーツァルト」の案内が来たので、4つのコンサートの

チケットを先行予約しました。内容も豪華で素晴らしく、マーラー・チェンバー・オーケストラ（指揮：ダニエル・ハーディング）、NHK交響楽団（指揮：ロジャー・ノリントン）、ウィーン交響楽団（指揮：ファビオ・ルイージ）、ウィーン・コンツェントゥス・ムジクス（指揮：ニコラウス・アーノンクール）です。チケットが取れることを祈っている状態です。

また、演奏会に関しては、5月の連休（5月3日～5月6日）に開催される「熱狂の日」音楽祭2006 モーツァルトと仲間たちというフェスティバルが東京国際フォーラムで実施されます。世界各国から1500人以上の音楽家が大集合し、朝9時から夜11時まで4日間で200公演を行う正にモーツァルトフェスティバルです。去年はベートーヴェンでしたが今年はなんといってもモーツァルトなのです。これからチケットを手配して5月の連休はモーツァルトでゆっくりと過ごしたいと思っています。

最後は、長年の夢であったザルツブルク音楽祭を聴きに行くことです。これまでにザルツブルクへは2回ほど訪れましたが、2回とも雪が降る時期であり、夏のザルツブルク音楽祭に参加するのが夢でした。そして今年は生誕250年ですから行けるチャンスがあればお金の問題は度返しして是非とも実現したいと思い、先日夏のツアーを申し込みました。

今年は何としてもモーツァルトを極め何かしらのものを掴みたいと思います。そして、これらを実現する上でかかるお金は、来年以降節約して対応しようと思っています。それほど今年のモーツァルト生誕250年に対して個人的に入れ込んでいます。

短い人生なので、チャンスがあるならば満足いくまでとことんのめり込んで少しでも充実感を味わうことが出来て、さらに自分自身の心の安定や生き方の再整理が図ればと思っています。

以上のような取り組みをしながら、モーツァルトに少しでも近づく事が出来ればとても幸せです。さらにこの一年は自分なりに感じたりあるいは日頃思っているモーツァルトに関する事を、メルマガに書き記しながら生誕250年を毎日モーツァルトで過ごしたいと凡夫なりに、ささやかな望みをもって過ごしたいと思います。このように凡夫にとって、この一年は例年以上に毎日がモーツァルトなのです。

モーツァルトと桜と日本人の美学

桜前線は山形と宮城に達し、これから秋田や青森、さらにGWには北海道へと移動するようです。桜は、植物分類学上の位置付けではバラ科に属し、さらに4つの属（バラ属、サクラ属、リンゴ属、ナシ属）に分けられるようです。

一般に桜と言われているものは、バラ科サクラ亜科のサクラ亜属に属するものです。また桜の起源ですが、いろいろな説がありますが、東洋的な花であることは間違いのないようです。

野生種は中国西南部を中心に約30種あり、また東アジア以外では、ヨーロッパから西シベリアにかけて3種、北米に2種あるとされています。さらに日本の山野に自生する桜には、ヤマザクラ、オオヤマザクラ、カスミザクラ、オオシマザクラ、マメザクラ、エドヒガン、チョウジザクラ、ミヤマザクラ、ミネザクラの9種類がメインで、園芸品種がもっとも多い日本では、なんと野生種と園芸品種とを含めて約300種以上の桜があるといわれています。

個人的には桜は、日本だけにあると思っていましたが、ヨーロッパにもあるとのことでした。その中でもドイツにある桜はなんでも古代のローマ軍がトルコ近郊から持ち帰ったとされています。さらにいまではヨーロッパの各地にも桜はあるようです。ただし、日本人が花に感じる美しさや儂さ、さらに侘びしさのような感覚は持ち合わせていないようです。

いつごろから桜がヨーロッパの都市で花咲くようになったかは分かりませんが、どう考えても桜は日本の花だと思います。桜に託されたいろいろな想いは数え切れないものがあると思います。桜は花開いてから数日で散り始めます。散ったあとはまた1年間ひたすら春の時期を待ちながら時を過ごすのです。

このようなことを考えると、身の回りの自然界には全てこの条理が埋め込まれていることに気が付きます。そこには哀しいとか悔しいといったものは無く、ひたすら時間の流れの中で決められた時期に行動を起こし、きちんとその役目を果たす健気な行動と、そのための意思というべきエネルギーが蓄えられているような気がします。

モーツァルトの音楽には、いろいろな感情の動きが表されています。気持ちが明るくなるもの、優しく愛おしく感じるもの、穏やかに心が落ち着くもの、美しい哀しさを感じるものなどまだまだ多くの表現されるべきものを含んでいます。

ただ、個人的に感じるのはモーツァルトの音楽には、桜が開花し、そして満開になり風に誘われてひらひらと散り行く桜の情景が浮かぶような音楽がないように感じられます。これは日本人特有の美学があるからであり、モーツァルトはこのような心を持ち合わせなかった結果だと思います。

よく言われることですが、モーツァルトは自然に関してあまり興味を持たなかったタイプの人間だと思います。あれだけ多くの都市を訪れ多くの人や景色や食べ物に出会ったはずですが、自然に関して書き綴った手紙は殆ど残されていません。

音楽に関しての内容が最も多いのは当然のことですが、身近な人間のことや食べ物以外に殆ど書かれていないのです。勝手な想像ですが、モーツァルトは興味の無い世界のことにものすごく無頓着な性格の持ち主ではなかったのかと思います。

特に自然の美しさに関してはこの傾向が強いと思われます。仮にモーツァルトが生きていた時代に、今の日本と同じような桜満開の様子をモーツァルトが観たときにどのように感じ、それを音楽にしてくれたのだろうかと考えることがありますが、これはちょっと無謀なことかも知れません。

モーツァルトが日本の季節の変わり目を体験し、四季の特徴を肌で感じたとするモーツァルトの音楽がどのように変化するか聴いてみたい気持ちがしますが、反対にモーツァルトが残した音楽には250年の時間と異文化の状況を飛び越えて、人の心の中に入り込む力があること自体の方が偉大だと考えなければならないのでしょう。

個人的な結論としては、モーツァルトの時代に仮に桜が一般的に普及したとしても、モーツァルトの音楽は全く変わることがなかったと思います。なぜならばモーツァルトは自然に関して興味が無い自然音痴だったのだと思うからです。

ですから、モーツァルトと桜は相性はよくないが、日本人の美学と桜は哲学的な一体感があると思うのは、私だけではないと思います。

「熱狂の日」音楽祭2006 モーツァルトと仲間たちを聴いて（5月5日）

2006年のGW期間中に東京国際フォーラムで開催されているのラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポン「熱狂の日」音楽祭2006～モーツァルトと仲間たち～の中で5月5日に行われた演奏を聴いてきました。5月4日はNHKFMで生中継があったり、また5月5日はNHKの衛星第二放送でも東京国際フォーラムに特設スタジオを設けて生中継されていました。

この音楽祭は昨年に日本で初めて行われたもので、もともとはフランス北西部の港町ナントにおいて1995年に誕生したクラシック音楽祭で、クラシック音楽の常識を覆すユニークなコンセプトで構成され、「ラ・フォル・ジュルネ（熱狂の日）」というネーミングそのままを現した音楽祭でどちらかというと純粋なクラシック音楽祭というよりは皆で気楽にクラシックを楽しむような催しと言った方がぴったりとくるかも知れません。

5月3日から5月6日の4日間で200公演（有料公演143公演）が開催され、それも全てモーツァルトですから、普通で考えると異常な感じを受けます。しかし今年がモーツァルト生誕250年なので、このように盛り上がるのかもしれませんが。出演アーティストが、1,500人とされているので、この数字だけでもその凄さが分かります。

さて、5月5日に会場で聴いたのは5000人も入るホールAで開催された2つの公演で、一つはモーツァルト：「レクイエム」ニ短調 K. 626で演奏は指揮：トヌ・カリユステ、ベルリン古楽アカデミーとRIAS室内合唱団によるものでソプラノ：スンハエ・イム、アルト：カレン・カーギル、テノール：ユッシ・ミュリュス、バリトン：コンラッド・ジャーノットによるものでした。ベルリン古楽アカデミーは、モーツァルトの時代の演奏スタイルを取り入れたもので、その当時の音の響きを体験する事が出来ると思い楽しみに出かけました。

レクイエム自体の解説は不要だと思いますが、モーツァルトが死ぬ寸前まで死の床で作り上げていた曲で、未完成の部分はモーツァルトの弟子のジェスマイヤーが手を入れて完成したものが有名ですが、その他にもいろいろ手を入れた版があります。

さて、演奏を聴いた率直な感想ですが、モーツァルトの当時の演奏スタイルを出来るだけ忠実に反映し演奏する方法も確かに正しいアプローチだと思いますが、250年後に生きる我々に合わせたモーツァルトでも一向に構わないのではないかと思います。事実モーツァルトは常に新しいものに取り組みながら音楽に取り組んで来た音楽家なのですからなおさらだと思います。

初めて実際に古楽器の音色や音量を聴いた感想ですが、正直ちょっとがっかりしました。特に弦楽器の音量が小さいのでRIAS室内合唱団の声量の負けていたのが気になります。また、木管楽器は素朴な音色でしたが、色気がない感じを受けました。唯一気に入った音色は、チンパニの音色です。乾いた音色で硬くさらに軽く聴こえるのですが、それがまたとての可愛らしくて古

楽器のアンサンブルにぴったりだと思いました。

個人的には、このレクイエムは近代的なオーケストラをバックに荘厳な雰囲気の中でモーツァルトの最後の声を聴きたいと思うので、結果的には今回の演奏には不満が残る音楽会となりました。もっとはっきりと言ってしまえば、今回の「熱狂の日」音楽祭2006は、一般的に言われるところの純粋な音楽祭ではなく、どちらかというとも幕張メッセで開催されるようなモーターショーや最新の技術を展示した展示会のようなもので、扱っているものがクラシック音楽に置き換わったといった感じです。

私が聴いた2つの演奏会に限って言えば、音楽の質は全体的に低いですし、聴きに来ている人もモーツァルトってどんな音楽なのだろうというような入門的な位置づけにいる人が多く居る印象を受けました。しかし、あれだけ多くの人がクラシックに何らかの興味をもって気楽に集まること自体は素晴らしいと思います。これらの中から、少しでもさらに純粋な音楽を求めて進む人が出てくれば、日本のクラシック音楽界もさらに伸展すると思います。

さて、2つ目の演奏会は、ポーランドのシンフォニア・ヴァルソヴィアという室内管弦楽団による演奏で、曲目はモーツァルトのピアノ協奏曲第9番変ホ長調K. 271「ジュノム」と交響曲第29番イ長調K. 201の2曲で、指揮は1928年生まれのポーランドのイェルジ・セムコフでした。2つの曲ともモーツァルトがザルツブルグに居る時のもので、考え方の合わない大司教コロレドとの軋轢のある中に書かれた曲で、個人的に気に入っている曲です。

ピアノ協奏曲第9番変ホ長調を演奏したロシアのピアニストのニコライ・ルガンスキーですが、1972年4月26日生まれですから今年34歳でこれから活躍するピアニストです。ピアノの表現力は素晴らしくとても良かったのですが、ルガンスキーが弾きだした瞬間からピアノの音がまるでフィルターを通して聴こえて来るような、そして高周波部分がカットされたような貧弱な音色と音量も弱かったのがっかりしました。

演奏会場の物理的な音響の問題なののでしょうか、詳しいことは分かりません。席は前から16列目でかつピアノを直視できるほぼホールの中心的な位置で、普通のコンサートホールであれば最高の席なのですが、音がめっちゃめっちゃ悪いのです。音が席の上を飛び越えているような感じでした。5000人収容のホールだからでしょうか。音に関して非常に不満が残りました。

最後に指揮者のイェルジ・セムコフに関してですが、1928年ポーランド生まれですから今年78歳の重鎮です。先日N響の定期を振ったスクロヴァチェフスキは、1923年に同じくポーランドに生まれ、今でも元気に良い演奏をしています。

セムコフの方は、決してメジャーな指揮者ではないのですが、ブルーノ・ワルターに師事した

といますからちょっとびっくりです。後半の交響曲第29番イ長調はきちっと演奏しており好感の持てる内容でした。しかし、オーケストラの実力は一流ではなく1.5流程度だったので惜しい気がしました。この指揮者に実力のあるオーケストラを振らせてみたいと思ったのは私だけではないと思います。

演奏会が終わったのが23時20分頃でした。急いで有楽町の駅に走り帰宅の途に着きました。どうにか終電の1本前で帰る事ができました。正直な思いとしては、来年のGWも同じ主旨の音楽祭が開催されると思いますが、私は自宅でゆっくりと好きなCDを聴いて過ごしたいと思いました。

モーツァルトに係わる世の中の狂騒

2006年はモーツァルト生誕250年にあたることから、音楽界だけでなくあらゆる業界でモーツァルトブームになっています。私が知り得るだけでも、モーツァルトに係わる商品として日本酒、牛乳、トマト、イチゴや鶏肉、さらに各種グッズ等があります。

さらに本来の音楽に係わるものとしては、今年の7月23日から8月31日までモーツァルトの生誕地であるザルツブルクで開催されるザルツブルク音楽祭を聴くコンサートツアーには例年の3倍以上の申し込みがあるとのことで、日本人のモーツァルト好きが現れています。

今回はこのようなモーツァルトを取り巻く世の中の狂騒に関して自分なりの意見を述べ、それぞれに対して最終的に良い方向に動くようにしてもらいたいと、密かに考えているところです。

今回のようなブームはモーツァルトだからでなく、過去にも多くのものがありました。それらを否定するものではありませんが、そのブームが去った後、心と後ろを振り向くとそこには何もなく、ただ多くの者が我も我もとその対称に向かって歩いてきた道だけが残っているような情景が浮かびます。

これは日本人の熱し易く醒め易い行動様式がそのまま出ているような気がします。あれだけ燃えたのに後はそれまで係わっていなかったように姿がなくなり、次のターゲットに飛びつくような、浅くて広い生き方をもった日本人が多すぎます。

興味を持つことはとても良いことですが、ある程度のところまで見極めるくらいの努力はすべきだと思います。単に周りが騒いでいるから、遅れない程度にちょっとだけ摘み食いするような行動は、反対にその人にとって不幸せだと思います。

なぜならば、そのような生き方をしていると、全てが全て安易な生き方になってしまうからです。この行動は特に今の日本人に多く見かける現象で、徹底的に取り組む日本人が少なくなりました。この傾向が続くと、確実に日本の国のあり方に大きな変化が生じ、国の方向が左右されるところまで行き着きます。

常に感じていることですが、今の人に足りないのは、個人としての哲学がないということです。哲学が失われつつある背景として、日本の国の見かけ上の平和が関係していると思います。今の高齢者にはその内容の良い悪いは別として、この哲学があります。今の特に若い人にはこの哲学が悲しいかなありません。

今の日本では生命の危険に脅かされる事がほとんど無いので、この人生を生き抜くという人生哲学が育たないし、また自由にその人の個性を活かすのが最も良い教育だと考えられているので

、その方向に重点が置かれていることが反対に個々の哲学を持ち得なくなってしまう要因になっていると考えています。

では何故モーツァルトの音楽が今の時代にまで残っているかというと、モーツァルトが音楽表現に対して確固とした哲学を持ち合わせていたからです。ですから大司教コロレドと喧嘩してまでも自分の考えを貫き、自分の人生をかけて自ら作り出す音楽を多くの人に聴かせたいとの考えがあったからなのです。

何事もそうだと思いますが、強い思いがないと成功しないし物事は前進しません。辛いけれどもある目標のために頑張る気持がないと駄目なのです。

話が逸れてしまったので、モーツァルトに係わる狂騒に戻しますが、以前よりモーツァルトの音楽を植物や牛等に聞かせると聞かせせなかったものより成長がよくなるとか、乳の出が良くなるとかで、昔からコツコツと挑戦している人がいます。

このような方はそれなりに考えをもって取り組んでいるので尊敬しますが、そうではなく今年がモーツァルトの年だからといって今まで取り組んでもいなかったのに俄かに取り組みあたかも昔から行っていたような言い方でビジネスをする輩は軽蔑します。何事も地道な努力が必要なのです。

反対にこのようなビジネスに簡単にのってしまふ俄かモーツァルトファンにも閉口してしまいます。いままでモーツァルトを聴いたこともない人が周りがモーツァルトと騒いでいるから、ちょっとだけ聴いてみようとするきっかけを掴むことに対しては別に拒みません。

しかし、きっかけにもならず単にファッションのように取り扱うのであれば、問題です。少しでも何らかのきっかけがあったのですから、最低限の努力を行って自分なりにその価値を分析し、結論を出して欲しいと思います。

このような馬鹿騒ぎ的なモーツァルト生誕250年が経過すると、心ある人以外は昨年はモーツァルトの年だったねと言うのであればまだいい方で、モーツァルトの音楽も聴かなくなってしまうのではないかと、今から心配しています。

折角モーツァルトを聴く機会に恵まれたのですから、さらに一步進んでモーツァルトの世界に飛び込み今の日本人に欠けている哲学に関して深めて欲しいと思っています。長年モーツァルトを聴き込んでいる人間からすると、今年の日本は気違いじみた状態になっており、とても心配です。

このように思うのは私だけではないと思います。確かに今年はモーツァルトにとって節目の年ですが、今後も永遠と繋がっているのです。もう少し、長期的な視野と考え方をもって今年のモーツァルト生誕250年を考えて欲しいと思うのです。

モーツァルトと宗教音楽

一般的に宗教音楽というと、カトリック教会の中心をなす礼拝の中で演奏される音楽で信者以外には関係ないように思われ、仏教徒が多い日本では余り関心を持たれない範囲の音楽ではないかと思います。事実私も宗教音楽の分野の作品を聴くようになったのは、五十路を過ぎる前後からで、人生で起こる多くのことを経験しある程度生きることによって免疫力が出来てきた時に、少しゆとりをもってこれらの作品を聴けるようになったのが事実です。

宗教音楽の中で大きな位置づけにあるミサとは、カトリック教会の中心をなす礼拝であり、全体の構成はキリエ、グローリア、クレド、サンクトゥス、アニュス・デイで構成されるミサの通常文と、教会暦や祝日によって変化する入祭唱、昇階唱、奉献唱などから成るミサ固有文によっています。このような背景を知って宗教音楽を聴くと、さらに理解がまるものだと思います。

個人的に聴いたことがある宗教音楽としてはミサ曲とかレクイエムがあります。バッハ、モーツァルト、ブラームス、フォーレ、ヴェルディ、ベルリオーズ等が挙げられますが、やはりモーツァルトが一番だと思います。ただブラームスとフォーレも捨てられませんが。

イメージ的には、モーツァルトが宗教音楽を残していることに意外を感じる方もいると思います。この私も、モーツァルトの明るい透明感のある音楽は、宗教音楽に合わないような感じがするので、この種の作品は少ないだろうと想像していましたが、何と約80曲ほども残しています。総作品数が626曲ですので、80曲というと全体の15%が宗教音楽の作品になる勘定になります。ちょっと意外な数字です。

しかし、よくよく考えてみるとモーツァルトは、ザルツブルク大司教に仕える教会音楽の職務に従事していたのですから当然のことだといえればそれまでのことになります。またこれらの作品を書いたのは、そのほとんどがザルツブルグに居た若いときのものであり、晩年にはハ短調ミサ曲やあの有名なアヴェ・ヴェルム・コルプス、そしてモーツァルトの最期の作品でありまた未完の作品であるレクイエムぐらいしか書いていないのです。

もちろん後期の宗教音楽は内容が充実していて素晴らしいですが、若い時代に作られた作品も、後期のものに劣らず素晴らしい作品が多いと思います。例えば戴冠ミサ曲では天真爛漫なメロディで、これがミサ曲なのかと思わせるほどの明るいもので魅力あるものになっています。個人的に好きな作品です。聴いていると何故か元気が出てくるような感じがします。

モーツァルトが仕えていた当時のコロレド大司教は、音楽的な理解が乏しく、なにかとモーツァルトにつらく当たり、最終的にはザルツブルクから追い出した、悪名高いザルツブルクの司教として知られます。また、自らのミサは長さが45分以上になってはならないと決めていた

ため、モーツァルトは殆どのミサ曲を短くせざるを得なかったので、その多くが30分程度で終わるように作曲していたようです。

ですから、このような限られた時間条件の中で、いままでのスタイルと異なるものを表現しようとモーツァルトは自分の才能を最大限に発揮し新たな作品を生み出していったのです。どちらかと言うと生活の面では問題が多かったモーツァルトですが、こと音楽になると妥協をせず、したとしても相手に分からないようにその反発精神を音と音楽スタイルに押し込めて作品を作り上げたモーツァルトは、やはり天才だったと思いますし、尊敬する面でもあます。

モーツァルトに限らずこの宗教音楽の分野を考える場合に、18世紀の中で音楽を表現する場として「教会」「劇場」「室内」の3つがあげられ、さらにそれぞれの場をそれぞれが置かれている時代の背景や当時の貴族や平民の生活状況から考えるのが理解を深めることが出来る一つの方法だと思います。この点から考えても「教会」という権威を持った場での音楽は、そう簡単に改革出来ない点が多かったと思われます。

このような中で、モーツァルトが作り上げた宗教音楽、すなわち教会音楽には革新的なのがあり、神に近づこうとした心の動きが見られるのではないかと勝手に思っています。のような音楽でもモーツァルトは本当に素晴らしいと思います。

モーツァルトに係わる新刊書籍を読んで

今年モーツァルト生誕250年に当たる関係から出版界でもモーツァルトを扱った書籍が書店を訪れるとかなり頻度で目に入るようになってきています。モーツァルトファンとしては歓迎するのが普通だと思いますが、内容が陳腐であるものは必要ないと思います。今回は、最近手にした2冊の書籍（「モーツァルト天才の秘密」：中野 雄 文春新書と「I LOVE モーツァルト」：石田衣良 幻冬社）に関して感想を述べたいと思います。

まず「モーツァルト天才の秘密」ですが、モーツァルト大好き人間としてはある面でとても勉強になった書籍です。それは、モーツァルトが生きた時代背景をいろいろな面から論じてモーツァルトがいた時点の様子を生き活きと明確にしている点です。

何事もそうですが、ある事実の背景にはその時代の特殊な環境や習慣や生活が影響していますが、この書籍はその当時の時代の様子を史実をもとに分かり易く解説しています。このような事実背景を頭の中に思い描きながら読んでいくと、モーツァルトと一緒に旅をしているように感じられたり、あるいは貴族への接触の方法だとか貴族の館での即興演奏の時の様子が手にとるように分かります。

さらにこの本を読んで初めて得た知識として、モーツァルトの就職口を捜すために母親とパリに向けた旅に関して、当初母親はマンハイムからザルツブルクに引き返す予定だったのですが、モーツァルトがアロイジアに夢中になってしまい当初のパリで職を探すことを放棄してしまいそうであるため、計画を変更して母親がパリまで同行することになったとのことでした。

仮にマンハイムでモーツァルトがアロイジアと出会わなかったならば、母親はパリに行く必要もなく、またパリで亡くなることはなかったであろうし、モーツァルトも確実に異なった人生を歩んでいたと思われます。このようなことを考えるたびに、人生における出会いの不思議さと宿命的な流れを感じます。

また、この本の中で主要な曲の解説と推薦のCDが紹介されています。CDに関しては最近の新しい録音のものでなく、どちらかと言うと昔のものが多く紹介されており、またその解説も昔のものに名演奏があるような内容のものでした。この点だけが凡夫としてちょっと不満な点でした。また、バランス感覚をもった音楽評論家が少ないのが残念なことでもあります。

次は、第129回の直木賞を受賞した作家である石田衣良の「I LOVE モーツァルト」ですが、この本はモーツァルトのセレナードのように軽快に一気に読み通してしまうほど肩の凝らない書き方で、澁みなく流れるようにさらっとした読み物になっています。

記述されている内容に関してはモーツァルトに関する書籍が扱う既存の事実が殆どでしたが

ただ、その事実を表現する方法が流石に作家だけあって、上手い書き方になっています。モーツァルトに関する話題を中心にいろいろな切り口で音楽論から人生論まで語っています。

これらの中で、気に入ったもののひとつに次のような内容のものがありました。いまの若い人の中で、感動することが苦手な者が多くなっているという指摘であり、その大きな原因の一つに、現代があまりにも情報が多すぎて、外から押しつけられるものが多いと指摘していました。

であるからして、恋愛に関する小説を読んでも、また音楽を聴いても、さらに映画を観ても自分から心を動かすことが出来ない主体性のない人物が出来上がってしまっていると述べています。

確かに凡夫が若かった頃と今の世の中を比べると明らかに情報の量は大幅に異なり、誰もが簡単にアクセスしてかなりのレベルの内容を獲得することが出来るようになりましたが、それらはあくまでも情報としての知識であり、自らの体験と結びついていないところに大きな落とし穴があるものと思います。

何事もそうであるように自ら当事者となって行動し、自らの考え方の検証をするような方向でないといつも流されてしまう人間になってしまおうと思います。もっともっと自らを行動させることが大切だと思うのです。

石田衣良の文章は五木寛之と同じように流れるタッチで書かれていることと、考え方が凡夫と同じ方向を向いていること、さらにモーツァルトに対する思いが同じなので親近感を覚えました。機会があれば石田衣良の作品を読んでみようかとも思いました。また、この本にはモーツァルトのCDが付録でついているので初心者にとっては入門書になると思います。

ザルツブルク音楽祭8月29日（S・ラトル、ベルリンフィルハーモニーを聴いて）

スイスのルチェルンから途中リヒテンシュタイン公国を通過してオーストリアに入り、夕方モーツァルトの生まれ故郷であるザルツブルクに着きました。今回で3回目のザルツブルクで少し慣れてしまった感じがありますが、それでも今回はモーツァルト生誕250年にあたる節目の年の音楽祭に、それも初めて聴く音楽祭でそういった意味では緊張感というか期待感が非常に高いものとなりました。

ザルツブルクに到着早々、その日の晩にコンサートで、それもいま話題のサイモン・ラトルの指揮によるベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の演奏で、さらに全てがモーツァルトプログラムという、これ以上の組み合わせがない超豪華なものでした。ですから祝祭大劇場に入る前から今晚の演奏はどのようなになるのだろうか、頭の中はモーツァルトでいっぱいでした。

さて、演奏曲目ですが、前半が交響曲第25番ト短調K. 183、ヴァイオリンとビオラのための交響協奏曲変ホ長調K. 364、そして休憩後は交響曲第40番ト短調K. 550でした。どの曲も名曲中の名曲であり、さらに今回の交響曲に関しては、短調による数少ない中から2曲とも短調という、ラトルが選曲に際して何らかの思いがあるのだと思いました。

さて、前半の2曲ですがまず交響曲第25番は、映画「アマデウス」の冒頭で流れてくる緊張感のこもった曲ですが、ラトルの演奏も同じように緊張感の中にさらに恐ろしいくらいの哀しみが隠れているような出だしで始まりました。初めてザルツブルク音楽祭で聴く曲が、このような精神的に高ぶらせるようなものでスタートしたので、個人的にはモーツァルトの生誕250年にふさわしい曲だと思いました。

モーツァルトの曲ですから通常よりも少し小さな規模の編成により演奏されていました。さらに演奏者がお互いに音を良く聴きながら演奏できるように、こじんまりと固まった形態で演奏していました。ヨーロッパのホールはもともと日本のように大きなものではなく、どちらかというところこじんまりとした大きさであることから、必然的に演奏者間の物理的な距離が狭くなります。NHKホールでは、演奏者の間隔はゆとりをもって配置されるのでお互いに音を聴きながら演奏する際に結び付きが少し弱くなるのではないかと思います。

さて指揮者のサイモン・ラトルですが、1955年にイギリスのリヴァプールに生まれ、小さい頃からピアノと打楽器を学び、1971年にロンドンの王立音楽院へ入学し、指揮を学び始めた音楽家です。19歳のときにジョン・プレイヤー国際指揮者コンクールに優勝しそれ以降オペラを含め欧米で活躍を始めたようです。

もっとも気に入った点は、主要なオーケストラからの申し出があったにもかかわらずその当時マイナーなバーミンガム市交響楽団を選んだ点です。どのような思いがあったのか分かりませ

んが、マイナーなオーケストラを引き受けて指揮する生き方に魅かれます。そして、短期間の内に世界的なレベルにまで引き上げた手腕は、各界から評価され、2002年には、ベルリン・フィルの第7代目の常任指揮者になり今日に至っています。

昨年1月末のモーツァルト週間の時に同じ祝祭大劇場でズビン・メータの指揮でウィーン・フィルハーモニーを聴きましたが、その時にはあのウィーン・フィルでありながら演奏はいまいちではないかと正直に思いました。演奏会場とか聴く席が問題ではなく、指揮者の意図がどこまでオーケストラの演奏者に伝わるかが大きな問題だと思います。

いままで、海外のオーケストラはかなりの回数生演奏で聴いてきましたが、ベルリン・フィルハーモニーは今回初めて聴く機会を得ました。不思議とこのオーケストラを聴くチャンスがなかったのですが、大好きなモーツァルトのそれも生誕250年の年のザルツブルク音楽祭で聴けるとは、何かの因縁だと思いました。

今回のラトルの演奏が従来他の演奏家と異なる点ですが、まず音楽が機械的でなく心の動きに合ったというか自然に流れていたこと、そして特に弱音が柔らかくそして優しくふわっとし丸みと暖かさをもったものであったことです。

また、今回のヴァイオリンとビオラのための交響協奏曲変ホ長調を演奏した、ヴァイオリンのフランク＝ペーター・ツィンマーマンとビオラのタベア・ツィンマーマンの演奏は、見事に呼吸があって素晴らしい演奏でした。特にビオラのタベア・ツィンマーマンは、現在世界最高のビオラ弾きといわれている女性で、確かに流れてくるビオラの音は優雅で落ち着いたもので、聴いていて惚れ惚れするような演奏内容でした。

演奏は3曲の中でどれをとっても本当に素晴らしい演奏でした。これが名演奏だと思えるほど、聴いていて心がモーツァルトにどっぷりと浸かり酔っていました。これだけを聴くためにザルツブルクに来て価値があると思ったほどの内容でした。そして、思ったことは何でも一流のものを体験する機会を多く持つと、その分だけ感動が強く、さらに自分の心に響くものがあり、本物を見抜く力が付くことだと思いました。

ザルツブルク音楽祭8月30日（オペラ「イドメネオ」を観て）

ザルツブルク音楽祭の2日目は、モーツァルトのオペラ「イドメネオ」を観ました。会場は、モーツァルト生誕250年に合わせて改築され新たに「モーツァルト・ハウス」と命名されたホールで上演されました。

こじんまりとしたホールでオペラを観るのに最適な大きさではないかと思いました。舞台から見ると客席は後ろに行くほど傾斜があり、どこの席からも舞台がほど良く観える構造となっていたため、私の席は1階後ろの座席であるにもかかわらず全体が良く観えるものでした。

さて、当日の演奏というかオペラの内容ですが、演奏や歌手の技量に関しては全く問題なく素晴らしい出来栄えだったと思います。演奏は、指揮：ロジャー・ノリントン、演出：ウルセル&カール＝エルンスト・ヘルマン、装置／衣装：カール＝エルンスト・ヘルマン、合唱指揮：アロイス・グラスナーで、当日のキャストはイドメネオ：ラモン・ヴァルガス、イダマンテ：マグダレーナ・コジェナー、イリア：エカテリーナ・シウリナ、エレットラ：アーニャ・ハルテロス、アルバーチェ：ジェフェリー・フランシス、祭司長：ギュンター・グロイスベック、海神ネプチューン：アンドレアス・シュラーガーでした。そして、管弦楽：カメラータ・ザルツブルク、合唱：ザルツブルク・バッハ合唱団で上演されました。

イドメネオの内容は、困難に立ち向かい最後は愛によりハッピーエンドになるというよくあるストーリーです。クレタ王イドメネオは、トロイア戦争から凱旋の帰途に嵐に遭遇しますが、上陸して最初に出会う人間を生贄に捧げるという内容の誓いを海神ネプチューンにすることにより助けられました。

しかし、上陸して最初に出会った者が皮肉なことに息子イダマンテだったのです。家臣は、イダマンテを愛するアルゴスの王女エレットラとともにアルゴスへ向かわせる案を出しますが、世の中は上手く行かないもので、イダマンテは捕らわれの身となっている敵国トロイアの王女イーリアと愛し合っているのです。

途中でいろいろな話の展開がありますが、イダマンテの危機にイーリアは自らを生贄にと申し出ると、そこで突然、海神の託宣が聞こえイダマンテを国王にと告げ、全てが突然にハッピーエンドになるものです。

ドラマの中心はイドメネオの父親としての愛情と神への責務の葛藤による悲劇と、もう一方ではイダマンテに対する、女性（囚われの身であるトロイアの王女イーリアと、アルゴスの王女エレットラ）の激しい嫉妬心による愛憎が繰り広げられるという、三者が織りなす愛憎劇も、もう一つの重要な要素だと思います。

オペラの楽しみは音楽と歌手とそして舞台だと思いますが、今回のイドメネオは音楽と歌手に関しては満足しましたが、舞台に関しては不満足でした。まず舞台の構成ですが、オーケストラピットの周りを約1m幅の渡り廊下で取り囲み、歌手たちはその渡り廊下を歩き回りながら歌うというもので、見ている側はあまりにもシンプルな舞台であるためにどうしても演奏と歌の「動」の要素に注目が行ってしまいます。

無駄な装飾が省かれ、美しい舞台と歓迎の批評もありますが、個人的には舞台は非常に退屈なものとの印象を持ちました。また、衣装も群集の女性は黄色ワンピース、男性は背広姿での上演でした。古代の物語なので、それなりの舞台衣装だとの先入観をもって観た関係で、現実に目の前で展開されるものを素直に受け入れられなかったのがその時の状況です。

また、言葉がイタリア語であり、会話の部分がかなりあることから、内容が理解できないと退屈してしまいます。舞台の上部に英語とドイツ語の翻訳が出る仕組みになっていましたが、日本のように舞台の両袖に表示器があるのではないので、見上げるていると首が疲れてしまうのとその間舞台を観られなくなってしまう弊害がありました。やはりオペラを観る場合は、言語をある程度理解した上で鑑賞する必要性を改めて感じました。

今回のオペラ鑑賞ではいろいろありましたが、モーツァルト生誕250年にザルツブルクでオペラを観られたことは幸せなことでした。このオペラは、バイエルン選帝侯国の依頼によって作曲され、1781年1月29日にミュンヘンの宮廷劇場「キュヴィリエ劇場」において、初演されています。

1月27日がモーツァルトの誕生日ですから、25歳になったばかりの時に上演されたものです。この「イドメネオ」を上演後、モーツァルトはザルツブルクに帰らずミュンヘンに長居しています。3月に大司教コロレドの命でウィーンに呼ばれコロレドの命に従って各種の仕事をしていましたが、最終的にはそれまでの不満が一挙に破裂し、とうとう5月には大司教と決別し、そのままウィーンに定住することになるのです。

そのよう意味では今回のオペラ「イドメネオ」は、モーツァルトが独立するための節目に書かれたオペラだともいえます。

指揮者ラファエル・クーベリックのモーツァルト交響曲

2005年の秋に開催された「NHK音楽祭2005」で聴いたバイエルン放送交響楽団演奏会をふと思い出しながら、以前にこのオーケストラの指揮者であったラファエル・クーベリックと彼が残したモーツァルトの後期交響曲について、書こうと思います。

まず指揮者のクーベリックですが、正式な名前はラファエル・イエロニーム・クーベリックで1914年6月29日チェコのビーホリーで、ヴァイオリニストのヤン・クーベリックの長男として生まれ、1996年8月11日スイスのルツェルンで82歳の生涯を閉じた、20世紀を代表する指揮者の一人です。

クーベリックは、祖国のプラハ音楽院でヴァイオリン、作曲、指揮を学び、1934年に卒業するとともに祖国のチェコ・フィルハーモニー管弦楽団を指揮してデビューするほどの才能があった音楽家でした。さらにこの時代の音楽家に多かったように、東側で起きた政治的な出来事を契機に西側へ亡命し、そこで新たな音楽を築きあげるタイプの音楽家でした。

事実、1948年にチェコで社会主義クーデターが発生した際にチェコの共産化に反対したクーベリックはイギリスで開催されたエディンバラ音楽祭への参加した際にそのままイギリスへ亡命したのです。

その後は、シカゴ交響楽団、コヴェント・ガーデン王立歌劇場音楽監督を歴任し1961年にバイエルン放送交響楽団の首席指揮者に就任し、以来1979年まで18年間にわたりバイエルン放送交響楽団とともに黄金時代を築いた指揮者です。

クーベリックと初めての出会いは、バイエルン放送交響楽団によるモーツァルトの後期の交響曲のCDを購入したのが最初でした。そもそもこのCDを購入したのはバイエルン放送交響楽団のゆったりとした素朴な音が気に入ったからで、その時は指揮者に関しては全く興味がなかったのです。

しかし、じっくりと聴けば聴くほど何故にこのような演奏が出来るのかととても不思議に思えたのです。それからバイエルン放送交響楽団は今まで以上にお気に入りのオーケストラになったし、またクーベリックもお気に入りの指揮者になったのです。

特にクーベリックの演奏で好きなのは、弱い音なのに強く感じられたり、穏やかな音で演奏されているのに心が躍るような躍動感が味わえたり、とても不思議な想いを感じることが出来るのです。クーベリックマジックとでも呼べるような音の作り方です。

また、これはバイエルン放送交響楽団が持つ特徴なのかも知れませんが、常に音が永遠に続く

ような持続感を持たせながら終わる点に大きな特徴があります。ですからいつもゆったりとそして幸せな余韻が残るのです。

さらにオーケストラの各パート間の音の受渡しに関しては、びっくりするほどの技術があり、昨年の秋に聴いた来日演奏会でそれを実感しました。これらの基礎を作ったのがクーベリックだと思います。

クーベリックは才能に恵まれていましたが、欲のない人だったようでほとんど終生バイエルン放送交響楽団の常任にとどまった人です。ですからこのコンビで録音された曲も多く、モーツァルト後期6大交響曲、ベートーヴェン交響曲、シューマン交響曲、ブラームス交響曲、マーラー交響曲、ドヴォルザーク交響曲等があります。

クーベリックの録音の中で個人的にはモーツァルトの交響曲が好きですし、さらに多くの指揮者が演奏するモーツァルトの交響曲の中で最も好きな演奏です。モーツァルトがもつ素直さや素朴さをそのまま出している演奏だと思います。他の指揮者の演奏は、それなりに味付けがされているので、聴き側の状態を判断して選ぶと良いのかも知れませんが、クーベリックの演奏は普遍的な演奏とでもいうのでしょうか、どのような状態で聴いても心休まるものです。

さて、バイエルン放送交響楽団はドイツ・バイエルン地方の主要都市であるミュンヘンを本拠として活動しているバイエルン放送協会の専属オーケストラであり、1949年に設立された比較的歴史の浅いオーケストラですが、現在ではベルリン・フィルと並びドイツを代表するオーケストラに成長しました。放送局の専属オーケストラの位置づけからみると、NHK交響楽団と同じような立場にあるといえます。

初代首席指揮者はオイゲン・ヨッフムで、2代目が今回話題のラファエル・クーベリック、その後キリル・コンドラシン、コリン・デイヴィス、ロリン・マゼール、そして2003年の秋から昨年のNHK音楽祭2005に登場したマリス・ヤンソンスに引き継がれています。このオーケストラの初来日が実現したのは、1965年でクーベリック時代でした。

個人的には残念で仕方ありませんが、一度で良いのでクーベリックの生演奏を聴いてみたかったと思っています。しかし、大好きなモーツァルトの良い演奏を残してくれたクーベリックには感謝しています。ブラボー！

昨年のもーツァルトフィーバーは何処に行ってしまったのか？

2006年はもーツァルト生誕250年に当たり、世界中がもーツァルトで沸きました。しかし、その反動とでもいうのでしょうか、今年はクラシック界はぱっとしない年で終わりそうです。例年と同じように世界中の有名オーケストラや演奏家が来日しましたが、何か盛り上がらないものがあります。次に大きな波が来るまでのちょうど端境期に当たっているのかも知れません。

もーツァルトファンとして昨年は確かに異常なほど盛り上がりを見せたと思いますが、その後の流れに疑問を感じています。昨年のフィーバーで良かったのは、もーツァルトに関するいろいろな情報が発信されたことです。

ですから、今まで知らなかったこととか気付かなかった事とかが明らかになり、有意義な年でした。またあらゆる分野でもーツァルトが商品化されその点から見ると、もーツァルトファンにとっては楽しい思いをすることが出来ました。

個人的にもーツァルト関連の商品を購入したのは、ドイツ製の万年筆でその名も「もーツァルト」モデルで、ザルツブルクを訪れた時に記念に購入しました。もーツァルトの体型に合わせたように普通の万年筆に比べると小さく、細い形状をしています。特別限定品であったためか、カラヤンが指揮したもーツァルトのCDが付いていました。現在も常に持ち歩き大切にしている万年筆です。

今年は、意外ともーツァルトに係わる話題が少なく、ザルツブルク音楽祭も個人的にはあまり関心を持たずに気が付いた時には、既に閉幕していました。さらにクラシック界も特別に注目すべきイベントもなく平穏な一年であった気がしています。

音楽や芸術の分野は、急激に変化するのではなく徐々に解明されながら物事が進んで行くのが大切だと考えます。昔は月に1度はタワーレコードに足を運びもーツァルト関連の新しいCDが発売されたかをチェックしに出かけましたが、最近はほとんど立ち寄りなくなりました。背景には、今までに揃えたもーツァルトの演奏内容で十分満足しており、これらを超えるものがなかなか出ないことも影響していると思います。

さらに個人的な生活では、通勤時間内に新聞、読書ともーツァルトを聴きながら過ごしていますが、やはりもーツァルトを聴いている時間が充実しています。同じもーツァルトの曲でありながら聴く側の状態によって大きく左右されるのは、もーツァルトの音楽の持つ精神性の高さだと思います。

心の緊張感が高い時にはさらに深い部分まで入り込むことが出来ますが、緊張感がなく惰性で

聴いてしまう時には、表面上をさらさらと流れるちょうどテレビCMの背後で流れているバックグラウンドミュージックになってしまいます。

モーツァルトは、まだまだ謎に包まれた作曲家だと思います。今後どのようなことが解明され、我々が抱いているモーツァルト像をぶち破り、真のモーツァルトに近づくことが出来るかが大きいな楽しみのひとつです。また、まったく異なる切り口で、モーツァルトの作品を読み直し、新しい解釈による演奏を世に紹介して欲しいと思います。

モーツァルトに沸いた昨年でしたが、今年は落ち着きを取り戻し、いつもと同じ変わらぬ状況となりました。何事にも流されず、じっくりとモーツァルトに接することが出来るようにしたいと思います。平穩の中に真実を見出すことが重要だと思うのです。

音楽とその時代背景との関係

どのような芸術や文化であっても、その時代の背景の影響を大きく受けて形成されるのが普通です。音楽も間違いなくその時代の背景にある大きな力を受けて出来上がっています。ですからこのようなものに関して理解を深めるには、その時代の背景、すなわち歴史を知ることが非常に重要になります。

例えば、現在個人的に興味をもって取り組んでいるのが、五木寛之の百寺巡礼ですがこれらの寺を訪問する時は、事前にその寺の歴史を調べさらにその時代にどのような事が起こっていたのかを理解して訪問すると、ひとつひとつの新たな出会いの時に、それぞれが関連して理解できるので、非常に新鮮にまた身近に感じる事ができます。

これと同じように音楽にもこのような要素があると思います。バッハを聴く時とモーツァルトを聴く時、さらにベートーヴェンを聴く時には、それぞれの時代に頭を切り替えて聴かないと誤解を生むこともあります。

例えばバッハの時代は教会の権力が非常に強い時代であり、音楽は教会のためにありました。ですから音楽を考える時には、常にその裏側にある教会の力を考えなければなりません。バッハが生涯で作曲した曲を大まかに分類すると、カンタータが約200曲、オルガン曲が約200曲、ミサ曲・受難曲が約20曲、モテットやコラール等が40曲もあり、殆どが会向けのものでした。このほかに平均率クラヴィーア曲集のような教育用のものがありますが、大部分は教会のためだったのです。

またバッハは、モーツァルトが生まれる6年前の1750年に66歳で亡くなりましたが、当時としてはそれほど注目を浴びることなく、歴史の流れの中に消えていったのです。今でこそ偉大な音楽家との位置づけにありますが、バッハは普通の人間として真面目にそして平和にその人生を過ごしたのではないかと思います。

またバッハがこれほどまでに注目を浴びるようになったのは、19世紀に入ってからであって、バッハが生きていた時代にはごく普通のことであつたのです。本当の評価というものはその当時でなく、後世になって初めてその真価が分かるものなのかも知れません。その当時はいろいろなバイアス的な考え方により、その真価が正しく評価されなかったものが、後世になって普遍性という物差しできちんと評価されるものだと思います。

バッハに比べモーツァルトは、小さい頃から神童として活躍するとともに、父親の教育と売り込みにより小さい頃からヨーロッパ中で有名になったのは事実です。しかし、後にモーツァルトが母親とともに仕事を見つけるために出かけたパリへの旅は、悲惨なものでした。20歳を過ぎたモーツァルトに対して、多くの人々がもはや関心を示さなかったのです。これも時代の流れの中

の自然なものだと思います。

またこの頃の時代背景には、音楽家のパトロンである貴族やその時代の王家の財務上が苦しくなってきた時代だけでなく、王の統治力も下がり民衆の力が台頭してきた時代でもあるのです。もともとモーツァルトは政治にはあまり関心がなかったのではないかと思います。どちらかと言うと民衆側の立場で音楽を作ってきたと思います。

その現れが、たとえばオペラの「フィガロの結婚」の場面の中で、貴族に対する風刺やまたその時代の男女の愛の形やその営みのようなことを音楽で表現するなど、下世話な事などを上手く表現しながらその時代背景を表現しているところは素晴らしいと思います。このような点を考えるとモーツァルトは庶民に近いのだと思います。

しかし、モーツァルトが作り出す音楽はその庶民の悩みや心の中の問題を浄化し、さらにそれらを昇華して天上の音楽としたものだから素晴らしいのです。このようなことを考えると、モーツァルトはやはり18世紀の後半に生まれたからこそ、さらにあの時代の背景的な制約があったからこそ、いま我々が21世紀になってもその素晴らしさを感じる事ができるのだと思います。

モーツァルトの後のベートーヴェンはどうだったのでしょうか。楽聖ベートーヴェンと呼ばれ、多くの人に親しまれているベートーヴェンですが、やはりベートーヴェンが生きた時代は、まさに激動の時代で社会の枠組みが大きく変わる時代を駆け抜けた作曲家でした。人間というものを人間の立場から見つめて、その回答を音楽に表したのがベートーヴェンだと思います。ですからその音楽の中には魂のような凄いエネルギーがあるのです。

また、ベートーヴェンが生きたその人生も波乱万丈のように見えさらに人間として素晴らしいように後世に伝わっていますが、よくよく調べてみるとこの背景にはベートーヴェンという人間を理想化した人間像を作り上げたいと思っていた現代版サポーター、親衛隊のような立場にあったアントン・フェーリックス・シントラーという人物がいたのです。

ベートーヴェンに関するいろいろなエピソードはこのシントラーによって作られたといっても過言ではないようです。ただし、音楽自体はベートーヴェンが創作したもので、現在我々が聴くことの出来る音楽は正にベートーヴェンですが、それまでに作られた話を正しいと思って聞くと音楽を曲げて聴くようになってしまうかも知れません。

また、別な面で考えなければならないことに、当時の演奏スタイルがあると思います。現代ではモーツァルトでさえ大きなオーケストラで演奏しますが、当時は小規模な室内オーケストラのようなもので、さらに大きな音が出ない、また音程等が不正確な楽器を使って演奏していた状況を考えないといけないのです。

作曲家は当時で演奏可能な範囲の中で最大限に訴えたいことを音に押し込めて表現したのですから、その状況をきちんと把握して再現し、その当時の想いを探る必要があるのです。一旦は当時の限られた演奏スタイルで再現し、その後に演奏者の思いを整理して再度当時のものと融合させ、かつその根底にある魂を壊すことなく新たなものを作りあげることが現代の音楽家の仕事であると思います。

どちらにしても、それぞれの作曲家が過ごした時代の背景をきちんと把握した後に、その音楽を演奏したりまた聴いたりすることが重要なのだと思います。

モーツァルトとパリ

12月が近くなると、街の中は何故か慌しくなり、そして街はクリスマスの雰囲気になります。この時期になるといつも華の都パリの街が思い出されます。クリスマスのイルミネーションは当然のことですが、いろいろなお店のショーウィンドウの飾り付けがいつもより更にお洒落になり、道行く人の目を釘付けにしている様子が目に浮かびます。

また、いつも感じるのですが、流石に絵画芸術の都市だけあってパリの街の色使いには素晴らしいものがあります。ヨーロッパの都市の中でもパリのような洗練された色使いをしている例を見た事はありません。民族の中に流れている血がそうさせるのだと思います。

さて、私がパリを訪れた時にモーツァルトが7歳の時に家族と初めてパリを訪問した時に宿泊したオテル・ド・ボーヴェ館を是非とも訪れたいと思い、地図を片手に探し当てたところ残念ながら工事中でその外観すら見れなくて唖然としたことを覚えています。機会があれば是非とも訪れたいと思います。

モーツァルトは人生の殆どを旅で過ごした旅の人と言っても過言ではありません。よって音楽以外のきちっとした教育が受けられなかったことと回りはいつも大人という特殊な環境の中で偉大な天才モーツァルトは育ったのです。普通の家庭で行なわれるような心や愛の配慮がモーツァルトという人間を形成する期間に仮にあったとすれば、我がモーツァルトはもっともっと偉大な作曲家として後世の人の心に残ったかもしれません。非常に残念なことです。「天は二物を与えず」とは正にこのような事をさすのでしょう。

モーツァルトが活躍していた頃のパリも現在と同じようにヨーロッパの中心的な都市でした。ですから当時の人々も何らかの夢を携えてパリを目指して来ていたのだと思われます。モーツァルトの長い旅の中で、パリへは計2回、1763年（当時7歳）に家族とまた1778年（当時22歳）には57歳の母親と二人で訪れています。

モーツァルトが2度目に訪れたパリでは仕事に就く事が出来なただけでなく、パリまで一緒に旅した母親が体調を崩し、この年の7月3日にパリで亡くなってしまい、悲しみのどん底で嘆き悲しんだ都市でもあるのです。さらに一旦はサン・トゥスタシュ教会の墓場に葬られましたが、その後その地区の工事がありこの地区にあった墓場が掘り返されて市内にあるカタコンブに葬られたとのことで、母親のアンナも浮かばれない状況です。

7歳の時のパリ滞在は通算約7ヶ月ですから全パリ（一部ベルサイユ宮殿等の日程を含む）滞在は1年強となります。結局この年の9月26日にはザルツブルグを目指してパリを後にしています。母とともに3月23日にパリに到着してから滞在は6ヶ月と3日間でした。7歳の時のパ

り滞在は通算約7ヶ月ですから全パリ（一部ベルサイユ宮殿等の日程を含む）滞在は1年強となります。

モーツァルトがパリで作曲した曲の中で有名なのは「フルートとハープのための協奏曲」があります。この曲はフランスでは人気のある曲だそうです。また、交響曲第31番ニ長調K297「パリ」がありますがパリを好んでいなかったモーツァルトがパリと題する交響曲を作曲したのも興味がありますが、同じ地名の名前が付いている曲であれば個人的には36番の「リンツ」の方が充実していると思われます。

モーツァルトの手紙から推察するにパリの街や音楽はモーツァルトには良く映っていない様に思われます。モーツァルトが2回目に訪れたパリの時代背景は、昔ほど貴族に経済的な余裕が無かったようで、就職先は勿論のこと演奏を行っても多額の謝礼は出なかったようです。ですからモーツァルトに対する職としてはベルサイユ宮殿のオルガン演奏者の職程度しか話しが無かったとのことでした。

また、当時のパリの音楽界はイタリア音楽とフランス音楽が絶えず争いをしていた時期で数年後の1770年代には有名な「グルック・ピッチニニ論争」が再燃するような下地のあった頃です。この論争は定型化し活力を失いつつあるフランスの宮廷オペラとイタリアの新たなジャンルであるオペラ・ブッフアとの争いであり、モーツァルト自身も「フランス音楽は全く何の価値もありません。」と堂々と述べている点はモーツァルトのフランス音楽嫌いが顕著に現れています。

また、当時のパリは音楽よりも他の芸術に理解があったようです。音楽の都はやはりウィーンやイタリアであり、フランスが音楽の中心地とはならないような感覚を持つのは私だけではないと思います。やはりパリは、色をメインとした絵画中心の都市だと思います。

幼少の頃のモーツァルトは神童として貴族や当時の権力者にその音楽的な才能を見せつけて、その聴衆たちを魅了していましたがその後、成人した後に訪れたパリは最早モーツァルトに対して驚きをもって対応することは無かったようです。

今では偉大なモーツァルトですが、モーツァルトが3月にパリに到着したことを報じる新聞記事が見当たらないことも、フランスの音楽界が混乱していたことを示すものと思われます。結局モーツァルトはこのパリでオペラを作曲することも無かったし、モーツァルトの生前中にパリの舞台上でモーツァルトのオペラがどれ一つも上演されなかったことも驚くべき事実です。

ドイツやイタリアでモーツァルトの天才さを遺憾なく発揮したことに比べるとモーツァルトとパリは水と油のような関係で最後までしっくりといかなかったことが悔やまれます。また反対に

天才にも苦手な面があったのかと私のような凡人にとってはちょっと安心した次第です。

また、天衣無縫の性格のモーツァルトは職を探すための手段としておべっかを言ったり、また人にごますりを行うような処世術を持ち合わせていないようでした。仮にモーツァルトにこのような処世術を持ち合わせていたならば、その後のモーツァルトの人生は大きく変わったのではないかと思います。

しかし、このような処世術を持ち合わせていなかったからこそ、いま我々がモーツァルトの曲を聴く事が出来、さらに心を豊かにすることが出来るのだと思います。このようなことになったのは決して偶然ではなく必然的にこのようになる宿命であったと私は考えています。

どちらにしてもモーツァルトとパリは相性が良くないのは事実であり、2回目のパリ訪問後再度訪れることはありませんでした。また、モーツァルトが死んだ後もパリの人々はモーツァルトのオペラを勝手に変更して上演するなど、モーツァルトが生きていたらさぞかし激怒したのではないかとと思われるようなことがあったようです。パリもモーツァルトを正當に評価していないような感じです。

一般的にこちら側が好意を持っていると相手も同じように好意を持って接するものです。今回は両方ともに嫌っているのでこのような結果になるのだと思います。私の個人的な感覚ではパリは大好きですが、モーツァルトにとってパリは良い思い出のあるところではないことは確かです。モーツァルトとパリは不思議な組み合わせです。

今年の1月8日NHK交響楽団の名誉指揮者であるオットマール・スウィトナーが87年の人生をベルリンで閉じました。学生の頃から時々N響の定期公演にでかけるようになり、社会人になってからは定期会員としてN響を聴き続けていますが、オットマール・スウィトナーは、ヘルベルト・ブロムシュテットとともに好きな指揮者でした。

スウィトナーのN響登場回数は13回とのことですが、このうち記憶が定かではありませんが定期演奏会で2～3回聴いた記憶があります。確かモーツァルトやベートーヴェンの曲であったと思います。

ちょうど今から30年ほど前になると思いますが、そのころはまだまだ音楽の神髄を見極めるような力はなく、ただただオーケストラが奏でる美しい音楽を聴きながら、いつも感動していた気がしています。

そのような中でオットマール・スウィトナーの印象が特に強く残っている理由は分かりませんが、何故か脳裏にスウィトナーの音楽が染み込んでいるような気がしています。

生演奏だけでなく、CDが発売されるとそれらを聴きながらさらにスウィトナーの良さが確実に刷り込まれていくような感じがありました。特にモーツァルトの演奏は印象強く残っています。

一言で言うならば自然さが前面に出たモーツァルトでした。先日より通勤時間にスウィトナーの演奏によるモーツァルトの交響曲を聴いていますが、飾り気のない正に自然な流れのモーツァルトで、改めてその偉大さを再確認しました。

モーツァルトの交響曲の演奏に関しては、ラファエル・クーベリックの指揮でバイエルン放送交響楽団の演奏が好きでいつも聴いていましたが、今回スウィトナーのドレスデン国立歌劇場管弦楽団による演奏を聴き、優劣付けがたい内容となっています。ただ、素朴で自然な仕上がりの面では、クーベリックよりもスウィトナーのほうが上だと思います。

スウィトナーのモーツァルトを聴けば聴くほど、心が清らかになり軽くなる感じを受けます。さらにモーツァルトが書いた全ての音符の音が、はっきりと聞こえるのも大きな特徴であり、この点はモーツァルトを演奏する上で特に重要なものだと思います。

モーツァルト以外の音楽家の作品では、全ての音がはっきりと聞けるのは少ないと思います。多くの楽器の音に重なり、音が厚くなってしまふことが原因だと思います。

音楽を専門に取り組んでいる方には、それぞれ分離して聞こえるのかも知れませんが、素人の身である凡夫にとっては難しいことです。ただし、指揮者が各楽器のバランスを保つことによって凡夫でも聴き分けることが可能になると思います。

スウィトナーは、この点が特に優れていたと思うとともに、モーツァルトの良い演奏を後世の人に残してくれたことは大きな財産であり、感謝しています。

スウィトナーは外見からもその人柄の良さが滲み出ている感じがあります。東西ドイツの統一がなされた直後にパーキンソン病による手の震えが原因で、潔く指揮者という舞台の幕を下ろし引退する行動に心を動かされるだけでなく、それだけ純粹に音楽を追求していた姿勢に心が打たれます。

私生活では、妻のほかに愛人がいて彼女との間に生まれた息子を含め、音楽から離れた年月は2つの家庭を微妙なバランスで保ってきた人でもありました。このような人間としての生きざまが、スウィトナーの音楽に現われていると思います。表面上の恰好良さではなく、本質をきちんとわきまえた人であったと思います。

モーツァルトを正しく表現する指揮者が居なくなったことが残念ですが、幸いにも音源として残っていることが救いとなっています。しばらくの間は、モーツァルトの曲はスウィトナーによる演奏を聴き、偉大なマエストロに感謝をしたいと思います。 合掌

ピアニスト イングリッド・ヘブラー

私の好きな音楽家はモーツァルト！です。では好きなピアニストは誰と聞かれたらイングリッド・ヘブラー、ウラディーミル・アシュケナージ、スヴァトスラフ・リヒテル、アンドラーシュ・シフ、ヴィルヘルム・バックハウスが挙げられます。それぞれみな素晴らしいピアニストです。

私も40リスト歳を過ぎた頃に約2年間ピアノを習いました。そのときの先生はハンガリーのリスト音楽院に留学し研鑽をつんだ藤城敬子先生です。今はピアニストとして活躍されていますが、いつかは日本の音楽界を引っ張って行っていただきたい方です。その先生からピアノの素晴らしさを学びましたがいまは忙しさを理由に中断しています。自らピアノを弾くことによりその難しさを実感しました。そして少しだけピアノにうるさくなりました。

今回紹介する大好きなピアニストはイングリッド・ヘブラーです。生まれが1926年ですから今年84歳です。ちょっと太目の優しさ溢れるおばあちゃんピアニストです。

個人的に過去3回、日本で開催された演奏会でモーツァルトを聴きました。とっても満足する演奏でした。ヘブラーの良さは、モーツァルトを弾く時のテンポだと思います。柔らかいタッチによるこの上ない美しい音色で旋律を歌いそれが自然に流れるため聴く側に抵抗感がなく知らず知らずの内に人の心の中に入ってきます。

そして大好きなモーツァルトの世界に導いてくれるピアニストです。モーツァルトのピアノソナタや変奏曲、小品を弾かせたらヘブの右に出るピアニストは現在いないと断言してもいいほどです。やはり誇張ではなく自然に歌うことが重要だと思います。

音楽だけでなく広く芸術の分野でも自然が最も基本であり重要なものです。ヘブラーが弾くモーツァルトのピアノソナタ全集は40歳代に録音したものと60歳代に再度録音したものがありますがどちらも素晴らしいものです。端整で清楚な演奏であれば40歳代の録音（PHILIPS盤）をまた、年齢を重ねた円熟味溢れる演奏であれば60歳代の録音（DENON盤）でお楽しみ下さい。

モーツァルトの視点から見たピアニスト小菅優について

最近若手のピアニストの中で小菅優が注目されています。1983年生まれですから今年24歳です。自分が24歳のときに何をしていたのだろうと振り返ると、入社して間もない時で、仕事のイロハを学んでいる頃であり、会社のために役に立っていない時期でした。

それに比べ彼女はすでに世界各地で演奏をするプロとして活躍しているのです。それもマネージャーを付けず全て自分で行うとのことですから、これまたびっくりしてしまいます。1月にNHKの「トップランナー」という番組に出演した彼女の模様を見ましたが、その軌跡には凄いものがあると正直思いました。

なんでも2歳からピアノを始め、小学生のときには何とドイツでオーケストラとモーツァルトの協奏曲を弾いたとのこと、ただただびっくりするだけです。さらにその後ドイツに留学し、現在まで研鑽を積んだピアニストです。喧嘩するときには、日本語よりもドイツ語になるとのこと、ドイツ的な考え方に浸ってしまっている印象を受けました。

一般に日本人的な感覚からすると、ショパンコンクールやチャイコフスキーコンクールといった有名な国際的コンクールに出場して、何らかの成果を挙げてその名が広まるのが普通だと思うのですが、この小菅はそのようなことがなく、地道に数多くのコンサート活動を通して欧州でピアニストとしての地位を築いてきた、稀なピアニストと言えそうです。

さらに驚きは、去年のモーツァルト生誕250年の年のザルツブルク音楽祭（8月20日モーツァルテウムにて）で、ピアノリサイタルを開催し日本人としては、内田光子以来2人目となる快挙を成し遂げたとのこと。

プログラムの内容もモーツァルトが主体で、「後宮からの逃走」序曲K384ピアノ用編曲（モーツァルトによる自作）、ピアノ・ソナタ第4番変ホ長調K282、ピアノ・ソナタ第5番ト長調K283、西村朗「カラヴィンカ」（初演）、モーツァルト「デュポールのメヌエットによる9つの変奏曲」ニ長調K573、小さなジーク ト長調K574、ピアノ・ソナタ第11番イ長調K331だったとのこと。当日の演奏の批評も良かったようです。是非とも自分の耳で聴いてみたかったと思っています。

また、それまでの演奏に対してドイツの各新聞は、「ダイナミックな音楽表現を可能とするとか」（ハノーバー紙）や「天使の翼の先端が頬に触れた瞬間を感じさせるピアニシモを表現出来るすばらしい演奏だ」（フランクフルト紙）などの批評を得て、着実に地位を確立しているようです。

また、その高度なテクニックに支えられ、さらに安定した演奏の中に美しい音色と深い楽曲理

解力があるなど、ぶっちぎれの賞賛が各方面から与えられています。これだけの情報から判断すると本当に凄いピアニストなんだと思いますが、個人的にはちょっと疑問を持っています。

確かにテクニックには凄いものがあり、難解な曲として有名なリストの「超絶技巧練習曲集」のCDの評価も高いようですが、ピアノはテクニックは勿論重要な要素ですが、最後は心で感じる感性が大きな要素を占めると思います。

先のNHKのTV番組の中でも話していましたが、生き方や考え方の面でベートーヴェンを尊敬しており、モーツァルトは女性関係がいろいろあるので人物的には好きでないような話をしていました。このような話を聞くと、意地悪な私はまだまだ経験の少ない若者だなあと、勝手に自分の経験から判断してしまいます。

多分このような背景があることから、現在の小菅にはベートーヴェンの作品を弾くときにはその厳しさがはっきりと表れ、ベートーヴェンの素顔を素直に表現できかつ、好感のもてる演奏が可能だと思います。

しかし、ことモーツァルトに関しては個人的に彼女の演奏を聴く限り、本来のモーツァルトの魂を反映した演奏になっていないと思います。それは小菅がそれだけの人生の機微をまだ経験していないことに大きな原因があると思うからなのです。なぜなら、この私も若き時代はベートーヴェンに憧れ、極端な言い方をすればモーツァルトを軽蔑していたからです。

彼女がもっともっと高いレベルの演奏が可能になるように、周りの人は厳しい意見を述べるのが大切だと思います。人が育つ背景には、必ず厳しい場面がありそれらを何回も何回もくぐり抜けて初めて、素直なそして純粋で卓越した世界に到達できると思っています。今後の活躍を期待したいと思っています。

モーツァルトのピアノ三重奏

三重奏曲とは、3つの楽器により演奏されるスタイルで、この中にピアノが入っている形態がピアノ三重奏曲と呼ばれる分野になります。今回はこのピアノ三重奏曲の分野に関してモーツァルトがどのように取り組んでいたのかをお話ししたいと思います。

一般にピアノ三重奏曲はハイドンやモーツァルトが初めて開拓した分野で、その後のベートーヴェン等の作曲家が充実させていったというのが世の中の考え方の流れのようです。そもそもバロック時代に2つの旋律楽器に通奏低音楽器を付加して演奏するスタイルがトリオと呼ばれていましたが、モーツァルトらがその当時注目の浴びつつあった楽器であるピアノ（当時はクラヴィーア）を主体としたものによって行ったという時代背景があります。

モーツァルトはピアノを加えた三重奏曲を全部で8曲残していますが、この中で1曲はクラリネットとヴィオラによる三重奏曲で、その他がヴァイオリンとチェロのものが7曲あります。ただし、7曲の中で1曲だけは3つの楽章からなる断章の作品であることから、本当の意味でのピアノ三重奏曲は6曲になります。

またこれら6曲の中で1曲（ピアノ三重奏曲第1番変ロ長調K. 254）だけが1976年にザルツブルクで作曲されています。この1年後にモーツァルトは母親とともに新たな仕事を求めてパリへ旅立つことになるのです。その結果は悲惨であったことは誰もが知るところです。また、残りの5曲は1783年から1788年までの6年間にウィーンで作曲されています。

このようにモーツァルトのウィーン時代における室内楽曲においては、その当時のクラヴィーアから新しい表現力をかちえたピアノフォルテという楽器を中心とした作品となり、それぞれ独特の性格をもったものとして作られたようです。たとえば弦楽四重奏曲とか弦楽五重奏曲といった作品は、弦楽器が中心でかつ純粋な形態を重んじるだけでなく、構成の点でも厳格な視点で創作されるのが通常です。

しかしモーツァルトは、あらたにピアノがもつ新しい響きを融合させ、より高い世界を切り開くために、ピアノを中心とする楽曲の作品に取り組んだのです。また、音楽的な質の面では確かにピアノ四重奏の方が優勢と思われるかもしれませんが、ピアノ三重奏曲は反対に8つの作品が残されており、大雑把かつ強引に見れば量的な面では優勢だったとも言えます。

ピアノを使った曲としては、ピアノ協奏曲がありますがこの分野はピアノが主役でかつピアノの華やかさを表現することに力点がおかれていますし、弦楽四重奏や弦楽五重奏さらにピアノ四重奏のようなものを純粋の室内楽と位置づけると、ピアノ三重奏曲はこの純粋の室内楽やピアノ協奏曲のレベルよりちょっと下に位置づけられる音楽と言えます。もっと言うならば、気楽に聞き流すタイプのジャンルではないかと思えます。

このようにピアノ三重奏曲は、モーツァルトの作品の中では地味な存在であり、どちらかという忘れかけられている作品ではないかと思います。曲を聴くと分かりますが、音楽的には若干軽い感じもしますが、しかしじっくりと聴くとモーツァルトの思いが散りばめられていることが分かります。

特に第4番から最後の作品の第6番までの3曲は、1788年に集中して書かれています。その背景には、経済的にだんだん苦しくなってきた時期に該当しますので、生活のために作品を量産したとも言えます。特に後半の作品は、プフベルク家のために書いているようなことが、モーツァルトの手紙の中で書かれているので間違いのないと思います。

このプフベルク家は、織物商を営んでいたようで、晩年のモーツァルトに唯一借金にに応じてくれていた人物のようです。きっと借金に応じてくれたお礼のような意味合いで作られたのかも知れません。しかし、このように困窮するような状態の中においても、美しい楽想が湧き上がり、そしてそれらが我々の心の中に快い流れとして再現できるのですから、素晴らしいと思います。

先ほど述べたように、確かに弦楽四重奏曲のような質の高いレヴェルまで到達していないようにも感じられますが、全ての音楽が常に精神的な質の高さを要求されるものではないので、ある意味ではさらりと受け流すような感覚で聴けるものが、今回紹介したピアノ三重奏曲なのです。

ただし、後半の第4番以降の3曲は、その制作過程を見ると非常に短期間の中で作られていることに驚きを感じます。というのも、この時期には交響曲39番から最後の交響曲にあたる41番やさらにヴァイオリンソナタK. 547、ピアノソナタK. 545が作られているからです。あたかも3年後の自分の死を予感していたようにも思われます。

今回のピアノ三重奏曲の中では、最後の作品に当たる第6番が好きです。モーツァルトの作り方も上手いと思いますし、シチリアーノ舞曲風の旋律が好きです。さらにバイオリンとチェロとピアノが上手く溶け込んで、哀しさの中に楽しさやそして繊細な美しさのようなものが浮き出たり沈んだりする様は、正にモーツァルトです。

ピアノ三重奏曲は、地味な作品ですが個人的にはモーツァルトの普段の何気ない動きが素直に出ているようで好きです。隠れた小名曲とでも言ったら良いのではないかと、自己満足の世界に浸っています。興味のある方は是非とも聴いて頂ければと思います。